
ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER
著 ひびき遊
原作 ガールズ&パンツァー製作委員会
VOL.2
MF文庫J


GIRLS und PANZER
VOL. 2
ガールズ&パンツァー
GIRLS und PANZER


「さむっ！　マジ寒いんだけどぉお〜」
並んだ大洗女子チームの、六台の戦車たち。その前で、私は手袋をはめた指をにぎにぎさせ、雪をばたばた踏みしめて暖を取ったよ。
ううう〜、パンツァージャケットの上からコートを着てるし、タイツだって重ね履きしてるのに冷えるー！
もちろん私だけじゃなくて、あちこちでみんな、白い息を吐きながら体をさすり合っていた。
「こんなところで試合やるんですかぁぁ〜」


できあがったのはトンカツ
以外に、仕込んでおいたシー
ザーサラダとポテトサラダ。
「ほわ〜！　我ながらいい
感じにできたよ！」「さもっん
がりきつね図だしっ。
「いっただっきまーす！」
そして五人で手を合わせ
て、華の活けた花瓶のお花を
眺めながら、さっそく食べるこ
とにする。

キャラクター紹介

アヒルさんチーム

バレー部チーム／戦車：八九式中戦車甲型

佐々木あけび
Sasaki Akebi



おっとりとした性格で我慢強い。前髪を抑えているカチューシャがチャームポイント。ブロックが得意。

河西忍
Kawanishi Shinobu



前向きな性格だが、その分短気。つり目がちの表情に気性がよく現れている。アタッカー。

近藤妙子
Kondo Taeko



何事にも一生懸命だけれど、時には空気を読めないことも。ハチマキがトレードマーク。ジャンプサーブが得意で、ここぞという時にサービスエースを決める。

磯辺典子
Isobe Noriko



バレー部キャプテン。部の再興を期して、戦車道に賭ける。セッターとして毎日トスの練習を欠かさない。

カメさんチーム

生徒会チーム／戦車：38(t)戦車B/C型

河嶋桃
Kawashima Momo



大洗女子の生徒会広報。片眼鏡の策士として、あうんの呼吸で会長の暴挙を支えている。3年生。

小山柚子
Koyama Yuzu



おっとりとした生徒会副会長。その分、会長と河嶋にはちょっと振り回され気味。その巨乳はみんなの憧れ。3年生。

角谷杏
Kadotani Anzu



大洗女子学園の生徒会長。小柄だが、その手腕は豪快で大ざっぱ。みほを戦車道に引っ張り込もうとしている張本人。3年生。



MF文庫J

ガールズ&パンツァー2

ひびき遊

原作:ガールズ&パンツァー制作委員会

口絵・本文イラスト●京極しん

CONTENTS

プロローグ　二回戦はアンツィオだよ！

「来ました来ました！　ＣＶ３３にセモベンテ……それにアンツィオ高校のリーダー車、Ｍ４０です！」

装填(そうてん)手席真横の扉を開けて、身を乗り出していた秋山優花里(あきやまゆかり)――ゆかりんが、慌てて癖(くせ)っ毛頭を引っ込めてきた。

って、ゆかりん！　おそろのパンツァージャケットの白スカートが、あわやめくれそうになったよ！

……装填手席から斜め下にいる、通信手席の私からはバッチリな位置ってのもあるけどさ。ぱ、パンツはダメー！

うん。後で乙女として注意しとこう。でないと、こう、モテないよ？　そこ、すっごく大事なんだからねっ！

――って、今はそんな場合じゃなくって。

私たちの乗るⅣ号戦車内は、緊張の中にあった。

「冷泉(れいぜい)さん、作戦通り、位置取りお願いします！」

一番上の席に居る、西住(にしずみ)みほことみぽりんが言う。

きりっとした空気は、さすが戦車道家元の「西住流」のコだよね、って感じ。

いつもは気弱そうなんだけどねー。でも今は、まったくそうじゃない。たんっ、と軽や

かな動きで、車長席足下のペダルを踏んだ。
それが私の左手にある、操縦（そうじゅう）席の背もたれと連動してて、小柄な冷泉麻子（れいぜいまこ）の両肩が叩（たた）かれる。
エンジンの音でやかましい戦車の中、これが車長の意志を操縦手に伝える、直接的なシステムになってるのよね。
「わかった」
素っ気なく、私とは小学校からの幼なじみの麻子が応えた。
小柄で、朝に弱くて遅刻魔だけど……うちの大洗女子（おおあらいじょし）学園一の天才で。そのくせ運動神経もよくて、戦車の操縦だってバッチリなんだよね。
麻子の鮮やかなレバー捌（さば）きで、Ⅳ号戦車がぶるる、と動いた。
ここは山中の試合場の、切り立った崖の上。そこに身を隠してたんだけど、少しだけ前に出て、すぐ停（と）まった。
長く伸びた、新しく付け替えたばかりの大砲で、下へと狙いを付けられるように。
で、今度はゆかりんの横に座る、砲手の五十鈴華（いすずはな）がせわしなくなる。
華は水平のハンドルを回して、砲塔（ほうとう）のモーターを唸（うな）らせた。左右を微調整したら、今度は縦のハンドルを動かして、大砲の上下の角度を操って――。
「ええと……。あら、見えました！」
さらりと長い黒髪をなびかせて、華が大きな固定式双眼鏡みたいな、大砲の照準器（スコープ）から顔を上げた。

うー、いつも思うけど、華の髪ってほんときれいなんだよねー。華道をやってるだけあって、おしとやかさ満開って感じだし。
私はストレートが決まらないから、ゆるふわモテパーマをかけちゃってるんだけどね？　これはこれでお気に入りではあるんだけど、でもやっぱ女の子なら、艶やかな長髪に憧れるよね！
って、いけないいけない。だから、見とれてる場合じゃなくて。
『……敵、全ザッ車輌、うまザザッ、おびき寄せまザザザー！』
『撃てー！　相手ザザ勢いにのせるな！　撃って撃ってザッちまくれ！　弾幕薄いぞ、なにやっザザザザ』
私のつけてるヘッドホンに、仲間の戦車からの通信が入る。
ううっ、でもかなり距離があるから、声が乱れるんだよね。聞こえにく〜い！
通信機の電波って、弱いのかなあ？　いつかみたく、連絡にはケータイのメールを使った方が早いかも。
ただ、それでもこのチームで、この「二回戦」にまできたんだもん。聞き取った声だけで、誰かは判別できちゃうよ。
「えーと。一年生のウサギさんチームと、生徒会のカメさんチームが、順調にやってるみたい！」
私は後ろを振り仰いで、車長のみぽりんに伝えた。
いちいち報告しなくても、車長でチーム全体の隊長であるみぽりんもヘッドホンをして

るから、平気なんだけどね。
でも、車長っていろいろ考えなくちゃいけないから、こうやって通信手の私が確認するのも大事なんだってー。
というかそのために、車長の「耳」となる通信手がいるんだから！　えっへん。
ところで、車長って……うん、私ずっと「社長」だと思ってたけど、違うんだって最近知ったよ……。
ううっ、さすがに恥ずかしいから、誰にも言ってないんだけどさ。秘密秘密〜。てへ。
な、なんで勘違いしてたんだろ？　そーだよね、戦車の長なんだから、社長なわけないじゃん？
「ウサギさんのM3と、カメさんの38tは、派手だから」
くすり、とその車長のみぽりんが笑った。
そうそう――。私も前に向き直って、通信手席の正面に付いた窓から、外を確認する。
戦車の窓って、砲撃から中を守るために、ほとんど塞（ふさ）がれちゃってるの！　細長い隙間（すきま）だけ、となったそこから確認すると……あ、見えた？　ここからだとかなり遠いけど、それでもピンクと金色の、派手なのが。
ピンクはM3戦車で、金ぴかなのが38tなんだよね。山の中でもはっきりと、動く姿が目立ってた。
でも。だからこそ勢いに乗りやすい敵（てき）、アンツィオ高校の戦車たちをおびき寄せるには好都合で。

そう！　これは……そんなM3と38tの派手さを利用した、こっちの目論見通りなの。

んーと？　私はさらに目を細め、細い窓から外を見直す。

わー！　いた！　……ピンクと金の戦車が進む、山腹の拓けた場所。その予定していたポイントに、他の戦車がうようよしてる！

あれってもちろん、アンツィオ高校のだよね。私は側にあるホワイトボードの地図上で、ほいほい、っとマグネットを動かした。

ひー、ふー、みーよーいっ……。たぶん、全部！　敵戦車を示すグレーのマグネットを、まとめて中央に集める。

そしてその側に、一年生のウサギさんと、生徒会を示すカメさんのマグネットを置いた。

さらにその外側には、待ち構えてる元バレー部のアヒルさんと、歴女チームのカバさんがある。

——窓の向こうでは遠目でも、敵の足が止まったのが見えた。

よし、今じゃんっ！　タイミングばっちり！

「こんな遠くから……本当に当たるのでしょうか？」

けれど、あれ？

砲手の華が、一瞬ためらう。

その不安は――わかる、かも。だって、確かに遠いもんっ。
こんな長距離から、Ⅳ号で狙いを付けたことって、あったっけ？
向こうで撃ち合ってる大砲の音とか、すごく小さく聞こえるしさ。
でも。
「大丈夫。Ⅳ号を信じて、五十鈴さん」
みぽりんが断言した。おおお？
「だって、今までの短砲身と違って、長砲身になったから。砲身が長くなったぶん、砲弾の速度も威力もアップしてるの。だから、届くよ」
――みぽりんの言うとおり。そう、このⅣ号戦車の砲身は、今まですごく短かったけど……この試合の直前に、長砲身ってのにまるごと交換しちゃったの！　かなり長くなったんだよ～。
もちろんそれはⅣ号を、パワーアップさせるためにやったこと。って、単にたまたま発見したのが、Ⅳ号戦車用だったってだけなんだけどね？
ただ、華が思わずためらったのは……単純に、「まだ長砲身で撃ったことない」からなんだけど――。
「ほんとは、今日までに試射くらいできればよかったんだけれど」
みぽりんがさすがに、そう付け加えた。
「交換したてでいきなり試合になっちゃったから。飛距離は伸びるけど、そのぶん勝手がかなり変わっちゃうし。もちろん短砲身のときより、熱による歪みの振り幅も大きくなる

から……」

「それはもう、仕方ないですよ、西住殿ー。換装できたのもギリギリで、レギュレーション申請に間に合ったのが奇跡なくらいですから！」

声の調子を落としたみぽりんを、ゆかりんがフォローする。

「登録申請できなかった新車輌よりはマシだな」

さらにぼそりと、麻子が言った。

そう。相手は、今回の試合条件いっぱいの十台で出てるけど——私たち大洗女子の戦車道チームは、たった五台でやってるの。

せっかく私、武部沙織が一年生の女子たちと、新戦車を見つけたのにね！

■1　勝者もいれば、敗者もいるよ……。

……あ、いや。「新」じゃなかった、かも。

戦車数が少ない私たちは、全長七・六キロの学園艦(がくえんかん)をうろついて、放置された戦車がないかを捜したんだよね。

学園艦ってのはそもそも、平らになった甲板には町があって、その中央に校舎が構えられてるんだけど。その地下、つまり艦自体も、学園の管理下になってるんだって。

ただ、学園艦は大きすぎて、全部が使われてるわけじゃない。

私たちの代で復活させた戦車道だけど、二十年前までは盛んで……その頃の古い戦車があるかもしれないってことで、みんなで学園艦内を探索したの。

そのときに発見したのが、今Ⅳ号に付けてある長砲身と、他二台の戦車ってわけ！

うち一台を見つけたのは、私と一年生六人なんだよ。えっへん！

——って、気が付けば広い艦内で迷っちゃってて、ほんと大変だったけどさ……。

帰り道がわかんなくて、一緒だった一年生たちは、見つけた古い戦車の前に座り込んで泣いちゃうし。

私は下手に動くより、「恋と同じく、迷ったら立ち止まることも必要だよ！」って励まして、みぽりんとかの救援を待ったんだけどね？

ううん、一番大変だったのは、いつしか恋愛相談を受けてたことかも。

「せんぱぁい！　戦車の話をすると、男友達が引くんです！」
「彼氏に逃げられましたあ！　戦車道やってるって言ったら……」
「どーしたらいいですか？」
とか、あの。
ううっ、わ、私なんか……生まれてからこの十六年間、彼氏がいたことなんかゴニョゴニョゴニョ。
というか、うちは女子校なのにどうやって知り合ったの⁉
って訊いたら、「ネトゲで知り合った」だって。えええ？
……ネトゲって、インターネットでやるゲームだよね？
彼氏って言っても、まだ直接会ったことはなかったみたいだけど——そんな出会いもあるんだ！　むしろこっちが参考になったよ！
ただ、私んとこはお父さんが、ネトゲとか禁止するんだよねー。
お父さんってば、頑固いんだもーん。こっちは寮で一人暮らししてるから、その気になればこっそりやれるんだけどさ……うーん。
でも、約束破るのも、なんかお父さんに悪いよね？　う〜。
い、いいもん。今は戦車が恋人だから……。
って、いいわけないけど、とにかく——！
『こちらカバさんザザッ！　これから、怪しいザザろに砲弾をぶザ込ませる！』

そう、今は試合中だもんっ。無線の受信機越しに、歴女(れきじょ)チームの声が届いた。

はっ、と私はⅣ号の窓からその動きを目視する。遠くても、歴女チームのⅢ突砲戦車は、派手なノボリが付けられててわかっちゃう。

だから、待ち伏せには向かなくて。……えええ？　茂みの中から、ノボリが丸見えになってるよ！　いいの？

――と、思った瞬間。

えっ。撃たれた⁉

ばっ、と折れたノボリが宙に舞った。私は思わず息を呑(の)んじゃう。

けど、いない？

敵(てき)の大砲の一発で吹っ飛んだ、ノボリの立ってた茂みには、真っ赤に塗られた背の低いⅢ突の姿はなくって。

『いた！　見た！　撃ったーザザザ‼』

元気な歴女(れきじょ)チームからの声。そして敵(てき)戦車の真後ろから、赤いⅢ突が飛び出した。ああっ、ノボリを囮(おとり)にしちゃったの？

すごい！

「アンツィオの足並みが乱れた！　……今ッ！」

そしてみぽりんが吼(ほ)えるよ。

「撃て――――！」

「はい‼」

ズドオオォォォン‼

……すんごい、音がした。

もちろん華（はな）が、みぽりんの指示で撃ったんだ。その迫力（はくりょく）は、これまでの短砲身とはだいぶ違うよ！

これが、威力が増したってこと？　今までは、撃ったら戦車の外に纏（まと）わり付（つ）いてた白煙さえ、なんか吹き飛ばされちゃった！

で、Ⅳ号の弾は――。

『アンツィオ高校のＣＶ３３一輌（りょう）、白旗！　行動不能！』

私たちの仲間の通信とは違い、はっきりとした声が飛び込んでくる。それは日本戦車道連盟の、審判員のジャッジだった。

わ、わっ！　当たった？

「やったじゃん、華！」

「……いえ、外しました」

はしゃぐ私とは違って、華が悔しそうに漏らす。

え、え？

「狙ったのはその手前の、リーダー車だったのですが……」

「大丈夫、五十鈴（いすず）さんっ。今回は殲滅（せんめつ）戦だから！　……秋山（あきやま）さん、すぐに再装填（そうてん）！」

「了解であります！」

がっちゃん！　とゆかりんが、返事と同時に次弾を拳で叩き込んだ。
そっか、前回まではフラッグ戦で、旗の付いたヤツを一台倒せばよかったけど。今回は殲滅戦だから、相手戦車をぜーんぶ倒さなくちゃいけないんだ！
「撃て――――！」
そしてみぽりんの声で、華が二発目を撃つ。
ひー！　停まってるⅣ号が、反動で揺れる揺れる。
だからなのか、『セモベンテ沈黙、白旗！』ってまたジャッジが入ったけど、華の表情は冴えなかった。
やっぱり揺れのせいもあって、リーダー車を外しちゃった？
だけど華も、ゆかりんも手を止めない。
撃って撃って、撃ちまくって――。
「わたくし……ようやく、掴めてきました！」
てんでばらばらに逃げ惑い、Ⅲ突やM3とかにも蹴散らされてく、アンツィオの戦車。
その残った最後の一台を狙ってか、華が一呼吸ほど間を置いた。
んで、次の瞬間――撃った。
ゆっくりと彼女は、照準器から顔を離し、後ろの車長席にいるみぽりんを見たよ。笑顔で。
だから私たちには、結果はもうわかってた。

『M40、白旗！　……以上、アンツィオ高校の全車輌、行動不能！　大洗女子学園の勝利です！』
やがてそんなジャッジが下され、大洗チームの勝利が告げられた。
いえーい♪
「やりました！」
「はい！」
手が届く距離に座る、華とゆかりんの二人が、ぱちんと手のひらを叩き合ったよ。
私もつい、左にいる操縦手席の麻子へ手を伸ばす。
でも「ん」って麻子は素っ気なく、こっちに視線を向けて終わった。もー、相変わらずものぐさなんだからあ～。
けどこれで、勝ったんだよね、私たち！
車長で、チームの隊長でもあるみぽりんを見上げると、私たちを見てにこにこしてた。
通信機からも、『やったーザザザ！』『二ザッ戦突破！』『マッチポイント取ザザした～！』ってみんなの声が、雑音混じりに聞こえてくる。
これで、ええと。
戦車道全国大会の参加校は、全部で十六しかないから。
「二回勝って、残るはたった……え」
十六が八になって、さらにその半分の……。
も、もう四校？　私は指折り数えて気付く。

——じゃあ次、「準決勝」ってことじゃん⁉

†

「準決勝だよ、準決勝！　つ、ま、り、ベスト・フォ————！」
「おっ、武部殿。それはパンツァー・フォー！　のノリですね？」
試合会場となった深い山中を抜けて、私たちはそれぞれの戦車で港まで戻ってくる。
私もゆかりんも、Ⅳ号戦車から顔を出してノリノリだよ！
快晴の空の下——停泊する学園艦まで、みんなで自走して戻ってこれたのは、これが初めてなんだもん。
もー、快勝もいいところだよ！　えへへー。
『それでは戦車道高校生全国大会、二回戦の速報をお届けします！　まず……なんと言っても今大会が二十年ぶりの参加となる、県立大洗女子学園の快進撃から！　殲滅戦となった今回の試合では、「アンチョビ」の愛称で昨年大活躍した安斎千代美隊長率いるアンツィオ高校と対戦となったわけですが、これを見事……』
「ねえねえ！　私たち、注目の的みたいだよ？　や〜ん！　モテモテになっちゃったらどーしよー！」
ゆかりんが車内に積み込んでた携帯用のラジオから、試合結果のニュースが流れる。
深夜のテレビにも放送があるんだけど、こっちの方が詳しくやってくれるんだって。

あっちは三十分で、ダイジェストを流すだけだもんねー。

でも、でもでも！　準決勝ともなれば、もちろん二試合しかないわけで、私たちの映像もばんばん出るみたい！

それに決勝ともなれば、毎年ＢＳで生放送とかもやっちゃうみたいだし～！

やーん！　もー、全国に私の勇姿が映っちゃうー！

ううん。映るまで、ぜーったい勝ち進んでやるんだから。

目指せ、決勝戦だよっ！

「次もぜーったい勝とうね、みぽりん！」

私は張り切って、車長席から身を乗り出してたみぽりんに言ったよ。

でも、あれ？

「それは、そう簡単にできるかどうか、わからないけどね」

みぽりんたら、困ったみたいに苦笑した。

その理由は彼女の視線の先を見て、私にもわかっちゃう。あ……。

学園艦（がくえんかん）の上に広がる町を、学校に向かって走る、五台の戦車たち。

町ゆく人たちから「二回戦勝利、おめでとう！」とか「かっこよかったぞー！」とか声援をもらって、ついいい気になってた私だけど……みぽりん同様、Ⅳ号の前後を走る戦車を見れば、はっとさせられた。

「すっかり、ぼろぼろですね……」

砲塔（ほうとう）の横についた扉を開けて、華（はな）も出てきて、息を詰まらせる。

うん、そーなの。遠距離に潜んでたⅣ号戦車は無傷だから、今までちっとも気が付かなかったけどさ。

金ぴかの38tもピンクで背の高いM3も、鮮やかだった塗装があちこちすっかり剥げちゃってた。

もちろんⅢ突はノボリすら吹っ飛んじゃったし、「バレー部復活！」って側面にペイントがされてた八九式なんか、うわ、ひどい。その文字が、すっかり削れて読めなくなってた。あらー。

そっか。そこでようやく、私も悟る。

さっきの、アンツィオ高校との二回戦。私たちはけっして、あっさり勝てたわけじゃなくて。

「……長砲身が活躍したからよかったものの、紙一重だったな」

通信手席に思わず腰を下ろした私に、隣の麻子がぼそりと言った。

う。それってきっと、的確な分析なんだろうなあ～。

そして同じことを、Ⅳ号戦車に乗ってる私たち以外のみんなが、なによりも感じていて——。

「これを機会に、塗装を元に戻しちゃおっか！　うん、それがいいよねー」

大洗女子学園の校庭、その奥にある三角屋根の倉庫群の前に、五台の戦車は集結した。

わらわらと私たちはそれぞれの戦車から降りるけど、誰よりも早くそう告げたのは、3

8tからみんなを見下ろす角谷(かどたに)先輩だった。
ツインテールと、いつも齧(かじ)ってる干しイモが特徴の、うちの小柄な生徒会長さん。ノリだけで戦車道を復活させた張本人だけど、意外と締めるところは締める人みたいなのよね。
38tの上にすっくと立って、会長さんたらぐるり、居並ぶ戦車を見回して。
「Ⅳ号は元から、カラーリングに手を入れてないからそのままでいいとして。今回はさー、相手を引き付ける作戦だったから、派手なのがうまく機能したけれど……まーもー限界だよね～。河嶋(かわしま)ぁ」
「はっ！」
名前を呼ばれて、片眼鏡(かためがね)の生徒会広報の河嶋先輩が、38tから顔を出すよ。
「耐水性の塗料、数そろえといてー。もちろん四輛(りょう)ぶん～」
「わかりました！　……ところで色は、どうします？」
「んー？　それぞれ元の色でいいんじゃない？　ねえ」
今度は私たちを見て、会長さんが意見を聞く。
みんな、反対意見はないみたい。
多少、「せっかくきれいに塗ったのになあ」とか「まっこと惜しいぜよ……」って声はあったけど、仕方ないって感じかな。
そーだよね、目立って標的になっちゃうのは、やっぱきついもんね！
ただこの中で、目をきらきらさせてたのが一人いた。

戦車大好き、ゆかりんだよ。

「くぅうう〰〰〰！　ついに、ついについに！　他の車輌も、元通りの美しくかっこいい姿に戻るんですね！　はい、はいはいはーい！　あのっ、会長殿！　個人的に、提案があります！」



そしてなんか、挙手までする。
んんん？
「ワタシも河嶋先輩にくっついて、塗料の調達に同行してもよろしいでしょうか？　いえ、ぜひお供させてください！　38tも、M3リーもⅢ号突撃砲戦車も八九式中戦車も、オリジナルカラーを再現してみせますので！」
「ん。それ採用～。じゃ、一緒に行ってきてー」
「あと、他にも人手がいるから……ついでに何人か、ついてこい！」
会長さんの命令を受けて、河嶋先輩がそう促した。
あ、だったら……。当然、ゆかりんと同じチームの私や華、みぽりんが思わず視線を合わせたよ。
でも、それより先に、「じゃあ」って前に出た人たちがいた。
黒いパンツァージャケットに、短いマントとか帽子とかハチマキとか組み合わせる、歴女チームの中の二人だった。
一瞬、意外に思えたけれど。
あ、そういえば……ゆかりんたら、この間の艦内探索のときに、自然と仲良くなれたんだっけ？
……「ぐでーりあん」とか。なんか、そんな『ソウルネーム』ってのまで、もらったみたいだしさ。

うん、友達が増えるのはいいことだよね！
「では行ってきます、みなさーん！」
びしっと敬礼してから、ゆかりんが河嶋先輩たちと離れてく。
いってらっしゃーい！　私たちも手を振って見送るよ。
ただ、そのときには会長さんが、またなにか思い付いたようで。
「んで、小山～」
「あ、はい」
会長さんに続いて声をかけられたのは、同じく38tから姿を見せた、副会長さん。
ポニーテールと学園一の巨乳を跳ねて地面に降りた、小山先輩だった。
そして。
「色は戻しちゃうわけだけど、そーなるとけっこう地味になっちゃうよねぇ。今日みたいに混戦になったら、うっかり敵味方の区別がつかなくなると困っちゃうし」
「え。あ、あー。そうですね……戦車の窓って小さいから、見間違うこともあるかも」
「でしょー？　……んじゃ、なんか案ない？」
「はい？　い、いきなりそう言われても、そのう」
困ります、って顔をしながら、小山先輩たら胸を揺らした。
あ、相変わらず見とれるくらい、大きいんだから。もう～。
ただ――かわりの案は、余所からぽこぽこ出てきたよ。
「あ、じゃあ会長ー！　かわりに学校の校章とかどうですかあ？」

「それだと地味じゃない？　あたし、もちょっとかわいいのがいいな～」
「ね、ね！　うちはウサギさんチームだから、ウサギさん描こうー！」
「あいーー！　じゃ、こんな感じかな？　んしょんしょ」
「わ！　桂利奈ちゃん、地面に指で、そんなささっと？　すごーい！」
「包丁持ったウサギ？　いいねいいね、カッコカワイイ！　さっすが、桂利奈ちゃんはやればできるコだよ～」
六人でチームをつくる、一年生の女子たちがきゃいきゃい言った。
ほう、と会長さんたら感心して。
「うんうん。そんな感じでいっちゃおっか！　じゃあみんな、よろしくぅー」
って、そのまま決まっちゃったよ！　ふええ。
さっそく小山先輩に、「こっちのカメのイラストは、任せたから～」とか、丸投げしてるし。小山先輩は、いっそう困った顔してたよ。あらら……。
「うちは、あんこうですねえ」
一方、こっちでは……なんか華がやる気になってる？
って、い、いつの間に筆と紙を出してきたの⁉
目がすんごく本気になってるじゃん！
逆に、麻子はまったくやる気がなさそうで、みぽりんは「あは、は」って苦笑してたけどさ。
他のチームもわいわいと、「じゃあ我らはカバの絵だな」「こっちはアヒルね。バレー

ボールも捨てがたいけど……」なんて話し始める。

だけど、そのとき——。

『さて、続いては聖グロリアーナ女学園とヨーグルト学園との対戦結果ですが……こちらも白熱しましたね～。なにしろ聖グロといえば、優勝候補の一角でしたから！　しかし、ここでなんとまさかまさかの大番狂わせ！　勝利したのはヨーグルト学園でした！　いやー、戦車道はまったくなにが起きるかわかりませんね！』

え、なに？

なんか今、信じられないニュースが飛び込んできたような？

ゆかりんがⅣ号戦車から出して、ちょこんと砲塔の横に置いてた、ラジオからの声だった。

いつしかBGMがわりになってたんだけど——さすがに聞き覚えのある名前を耳にして、この場にいたみんなが一斉に黙ったよ。

だって、だって、だって。

聖グロリアーナ女学園、って言えば！

「みぽりん！　私たちと練習試合した、あの聖グロだよね？　紅茶くれた！」

「う、うん……。ダージリンさんっ」

みぽりんがラジオを見つめて、聖グロの隊長さんの名前を呼んだ。

ううん、みぽりんだけじゃない。

戦車の周りにいる私たち全員が、聖グロの強さを知ってたから……みんな、呆然とし

ちゃう。
なんで？
どーして？
『また公式戦で会いましょう。ごきげんよう』
あの隊長のダージリン様とは、練習試合の後——確かにそう、約束したのに……！

††

「……勝たないと、いけないんだよね」
ゆかりんが塗料の調達から帰ってきて、他のチームが塗装の準備に取りかかる。
Ⅳ号はほぼ無傷だから、私たちあんこうチームだけは「あんこうマーク」の案だけ詰めようとして、倉庫の端っこでパイプ椅子の円陣をつくってたんだけど。
ふいに、ぽつりと漏らしたみぽりんの一言に、私たちの手が止まった。
だってそれは、あまりに思い詰めた感じだったから。
「そう。負けると、意味がないんだよ……」
みぽりん？
その響きがとても重くて、私は呼びかけることさえできなくなる。
それって……もしかして。
私はあることに思い当たる。

——みぽりんがずっと引きずってる、「戦車道から離れてた」理由に関係する、のかな？

それを今までにも、何度となく察してる私と華が、思わず顔を見合わせちゃう。

そのたびに、うまく訊けないんだけど——でも。

かわりに、口を開いたのは麻子だった。

「勝負だからな。勝つ者がいれば、負ける者もいる。仕方ないことだ」

ひょええ！　昼間は寝ぼすけなんだけど、日も沈み始めた今は、麻子ったらクール全開だよ？

ぽん、って軽く突き放しちゃう。こっちがどきっとしちゃうくらい。

ううん。……それは学年主席の麻子だからこそ、よくわかってることなのかも。

順位がつくことの厳しさを、きっと一番知ってるんだもん。

そして、今度は「成績が振るわなくてあわやお父さんから、戦車グッズを取り上げられそうになった」ゆかりんが言う。

「でも、楽しかったじゃないですか。勝っても、負けても」

「え？」

それはみぽりんにとっては、心底意外だったのかも。あっけにとられた表情で、ゆかりんを見た。

「サンダース大付属との試合も、聖グロリアーナとの試合も……それから、練習も。整備も、いいえ、それだけじゃなくて。練習の帰り道だって、みんな」

えへへ、ってゆかりんがほんとに楽しそうに笑った。
そう、だよね。
確かに勝ち負けはあるけどさ。でも、負けたからって、その「過程」がなくなるわけじゃないし！
「あ。これ、いいんじゃないですか？」
そしてゆかりんは、買い出しの待ち時間に描き溜められた、華の図案を一枚選ぶ。
筆で描かれたそれは、タラコクチビル顔のあんこうで……うん、悪くないよね？　なんかぽってりかわいくて！
「実はそれ、自信作なんです！」
ほっぺに墨まで付けた華が、にっこりと微笑んだ。
「……ペイントするなら、砲塔の両側面だな」
麻子なんかもう、側に停めてあるⅣ号戦車を見上げて言うよ。
そーだよね！
こうやってマーク一つつくるのだって、楽しくてさ。
私も自然と、倉庫の中で蛍光灯の光に照らされる、Ⅳ号に視線を向けた。
その姿は最初、ここで発見したときとはまるで違う。
みんなで埃や錆を取って、油を差して、動かして――。整備のほとんどは自動車部に任せてるけどさ、でも。
「私も、ゆかりんと同じだなー」

私たちも手伝って交換したばかりの、Ⅳ号の長くなった砲身を眺めて口を開いた。
「戦車って……最初は、狭くてお尻痛くて大変だったけど。なんか、だんだん乗るの楽しくなったもん！」
「そうですよね」
「まぁな」
華と麻子が頷いたよ。
「そりゃもうっ、戦車道は最初から楽しいですから！」
なんて、ゆかりんは当然のように断言した。
あはは。うん、ゆかりんは全力でそうだよね～。
ただ私なんかは「モテるかも！」ってだけで、戦車道を履修しちゃったからさ。う。でも、未だにモテとは無縁なんですけど……。
ど、どーして⁉
いや、だけど――。
「ところでさ、私、戦車に乗り始めてから痩せたよ⁉」
これはモテ度アップ間違いなし、だよね？
私はつい、パンツァージャケットの上から、減ったお肉をつまんでみせる。ニーソックスの足だって、ちょっとは細くなったもん！
たまに麻子が「おばぁから送ってもらったけど食べきれない」って、お菓子の差し入れを持ってくるから、ちっとも痩せなかったんだけどさ。

うっ、だって、夜のお菓子は魔物だよ……。や、やだもー！
まあ、麻子ってば食が細いのよね。仕方ないか。
だけど、あれ？
最近はそうでもない、かも？
「いい運動になるのかもな。そういえば……少しだけ低血圧が改善されたような」
ふむ、と麻子が自分のお腹を軽くなでた。
「以前より、食べるようになったからか？　朝練でも、最近は寝ぼけずに運転することができるし」
「おお、それって血行がよくなったんですかね？　戦車に乗ると、どうしても血湧き肉躍りますし！」
「あのう、秋山さん？　それは、ちょっと違う気が～」
華が苦笑し、ゆかりんが「？」って顔をしたよ。
ただそんなやり取りに、みぽりんがいつしか頬を緩めてて。
「あ。そうだ、わたしも……戦車を楽しいって思ったんだ」
そしてみぽりんは顔を上げて、倉庫内に並ぶ戦車たちを見回した。
「Ⅳ号にクッションとか、芳香剤とか、一輪挿しとかをみんなで積んで……そしたら他のチームは、いろんな色で塗装までしちゃってて。前は、ずっと勝たなきゃ、って思ってばかりだったのに。だから負けたときに、戦車から逃げたくなって……」
負けた？

あ。それはたぶんみぽりんが、この大洗女子に転校するきっかけになった、黒森峰女学園での……？

――そんな目で、私が見てたからなのかな？　はっ、としたみぽりんがおどおどと瞳を泳がせた。

いつもの、「訊かれたくない」って仕草。

でも……。

「あのね。わたし、去年の決勝戦で、ミスをしたの」

静かに深呼吸してから、みぽりんが意を決したように語り出した。

え、ええっ？

「決勝戦は、黒森峰とプラウダ高校との対決で。お姉ちゃんが二年生で隊長を務めて、たぶんその縁で、わたしは一年なのに副隊長に選ばれて」

「！　ちょっ、みぽりん!?　いいの？」

話しちゃっても？

私だけじゃなくて、華も麻子も、ゆかりんも息を呑む。

けれどみぽりんは、ちょっと笑った。

「うん。友達、だから……聞いて欲しいの。ずっと黙ってたわたしの、昔のこと」

「みぽりん……」

「決勝戦はフラッグ戦に決まって、副隊長になったわたしの車輌が、フラッグ車に選ばれ

たの。だけど試合中に、味方の戦車が深い川に横転して、どんどん沈んでいっちゃって。……気が付いたらわたし、自分の戦車から出て、川に飛び込んでた。水没していく戦車のハッチを開けて、助けようって」

水没？　ひええ！

私たちは想像して、思わず青くなっちゃった！

そりゃ、早く助けなきゃっ。

だけどみぽりんが、ふるふると首を振った。

「でもそのせいで、わたしが指揮をしなくちゃいけなかったフラッグ車は立ち往生して。撃たれて、負けたの」

十連覇できなかった……。

最後にはぼそぼそと、そう呟いて。

「お姉ちゃんが、隊長だったのに」

それで――！　私はようやく、腑に落ちる。

というのもみぽりんのお姉さん、黒森峰女学園の西住まほさんとは一度、戦車道の抽選会で会ったことがあったから。

でもまほさんは、すごく素っ気なくてさ。

『まさかとは思ったけど……また、ここで会うなんてね』

なんて、妹のみぽりんを突き放してた。

その理由が、そういうことだったんだね。

でもさ。
「あの、西住殿。ワタシ、去年のあの決勝戦の試合、テレビで見てました」
私がしゃべろうとするより先に、ゆかりんがちょこん、と挙手して発言した。
へ？
びくっ、となるのはみぽりんだったよ。
けどゆかりんは、真っ直ぐにみぽりんを見つめてた。
「ワタシは、あのときの西住殿の判断は間違ってなかったと思います！」
「！　秋山さん……」
「だって、助けに来てもらった選手の人は、西住殿に感謝してると思いますよ」
……うん、だね！
それは私も言おうとしたこと。うんうんって、華や麻子も頷いてる。
私たち四人はただ、みぽりんに微笑みかけた。
「あ、ありがとう」
それが伝わったのか、みぽりんはゆかりんに嬉しそうな顔を向ける。
すると――あれ？
ゆかりんたら、なんかみるみる赤くなった？
「う、うわっ。すごい、ワタシ、西住殿にありがとうって言われちゃいました！　ねえみなさん！　あ……でも二度目かな？　サンダースへ偵察に行ったときにも、言ってもらえたような？　えへへ」

「……。オッドボール軍曹（ぐんそう）」
そこにぽつりと呟（つぶや）いたのは、麻子（まこ）だった。
はう！　ってゆかりんが頭を抱える。
「ああっ、それ言わないでくださいよ！　あんな偽名しか出てこなかったんです～！」
そんなこともあったね！　私たちはいつしか、全員で笑顔になってた。
そ！　私たちは私たちで、こんな感じでいいんだよ。
勝つとか負けるとかより、もっと大切な時間を今、こうして過ごしてるんだから。
「戦車道の道は、一つじゃないですよね」
たぶん同じことを考えてたのか、華（はな）が言う。
そーそー！
「つまりさ。私たちの歩いた道が、戦車道になるんだよ！」
じゃーん！
私がなんか、いい感じに締めちゃった。いぇいいっ。
と、そのとき――。
「お前たち、なにを悠長なことを言ってる？　すべては勝ってこそなんだ。絶対に、次も勝つぞ！」
パンツァージャケットから、汚れてもいい体操服に着替えた河嶋（かわしま）先輩が、刷毛（はけ）を片手にやってくる。
ううん、私たちだけに言ったわけじゃない。倉庫内で作業をしてる、他の女の子たちを

見渡して、だよ。
「聖グロリアーナの件を気にしていても仕方ない。それより、次の対戦相手はわかってるな？　……準決勝は、昨年の優勝校、プラウダ高校だぞ！」
プラウダ？
あ、それって……。
私はみぽりんを見ちゃう。去年の決勝戦で、みぽりんのチームを破った学校だった。
「いいか、負けたら終わりなんだからな！」
河嶋先輩は、つけてる片眼鏡さえ飛ばしそうな勢いだった。
それは、いつものことなんだけど。
「どうしてですか？」
「負けても来年があるじゃないですか」
体操服姿の一年生たちから、そんな声が上がったよ。
ねえ？　と頷くのは、ジャージで塗装作業をしてたバレー部のメンバーだ。
「初出場でここまで来れるなんて思わなかったし、相手は去年の優勝校だし、ここは胸を借りるつもりで」
「それではダメなんだっ‼」
倉庫の中に、河嶋先輩の声が鋭く響いた。
ふえ？　私たち、他の面々は思わずしん、としてしまう。
——だから。

「まーまー」
そう場を取りなしたのは、外から倉庫に入ってきた、セーラー服姿の会長さんだった。
って、いつの間に外に出てたの？　とゆーかまったく作業する気もなさそうで、いつもみたく干しイモを囓ってるし！
ううん。会長さんは会長さんで、やることはちゃんとしてたみたい。
「確かに、勝たなきゃダメなんだよね～。そのためだったら、できることは全部するよー。ほら！」
え？　すると、履帯の回る音が聞こえた。
外から、戦車がやってくる？
私たち倉庫の中にいた面々は思わず、夕日の差し込む扉から外を見た。
グラウンドからやってきたのは、緑っぽい色の、一台の戦車。
あの、履帯の前の方が剥き出しになってる、ずんぐりとした体型は——なんだか見覚えがあった。
「あれはっ、ルノーＢ１ｂｉｓです！　動けるようになったんですね‼」
真っ先に声を上げたのは、戦車に詳しいゆかりんだよ。
あれって、みんなで捜し回って見つけた戦車の、一つじゃん！　足りなかった部品がようやく届いて、うちの自動車部が直したんだね！
わあ！　って私たちは誰もが、倉庫に入ってきた新戦力に沸き立った。んもー、ゆかりんなんかダッシュだよ？

「ルノーはシャールとも呼ばれるんです！　シャールの語源は、チャリオット……英語の戦闘馬車のことですよ！　あーこの独特の、足回りのデザインが垂涎ものですぅううううう！」

ゆっくりと停車したルノー＝シャールに、ゆかりんはべたべた触った。

操縦席から鉄の扉を開けて出てきたのは、小山先輩だよ。「はあ～っ」って、ジャージの上からでもわかるおっきな胸を揺らして、疲れたように溜息を吐いた。

「運転方法って、38ｔとけっこう違うのね……。き、緊張したぁ」

？　そーなの？

私は通信手だから、そういうのはわかんないけど。あ、そっか。小山先輩は、カメさんチームの操縦手だもんね。

「戦車はつくった国によっても、手がけたメーカーによっても、まるで別物だから」

当たり前だよね、とそう呟くのはみぽりんだった。

へええ～。恋愛が男の人のタイプによって違うのと、同じだね！

だから。

「んじゃさー。どこのチームがこれに乗り換えよっか？」

そう会長さんが切り出したとき、「あ、あの」とみぽりんがおずおずと口を挟んだ。

「……戦車はそれぞれ扱い方が違うから、同じ戦車に乗り続けて練度を高めた方がいいと思います。それに乗り換えだと、単純に、こっちの戦車の数が増えませんし。それは……すごく困ります」

「あ、そーだね。さっすが西住流！」
ぽん、って会長さんが手を叩く。
「んじゃー手っ取り早く、人員を補充しちゃおっか～」
そして干しイモを齧りながら、気軽に言った。
へ？　補充って、でも。
私や華、みぽりんに麻子は顔を合わせる。
「おー！　いいですねっ、集めましょうー！」
なんてゆかりんだけは、シャールに頬ずりしながら嬉々としたけれど。
「まあ。そ、そんな簡単に集まるのでしょうか」
「……秋山さんに言わせれば、『戦車が嫌いな女子なんていません！』だろうが」
華と麻子がこっそりと苦笑いした。
そーだよね。私もつい、倉庫内を見回しちゃう。
だって生徒会が大々的に呼びかけて、戦車道を履修したのが、ここにいるたった十数名で――。

2　そんな大事なこと、なんで私に⁉

ぴんぽんぱんぽーん！

翌日の、学校のお昼休み——注目を集める、リズミカルな音が流れた。

それを合図に電源が入るのは、校舎のあちこちにあるテレビだった。

そこに映るのは、放送委員のつくった校内ニュース番組、その名も『アンコウステーション』だよ。

『こんにちは！　放送委員の送る不定期番組、アンコウステーションの時間が、いつものように突発的にやってきました！　ワタクシ、みなさまおなじみの、王大河がお届けしまーす！』

放送委員の腕章を付けた、眼鏡の女の子がマイクを向ける。

その先にいたのは、学内番組用のセットの前に立たされた、パンツァージャケット姿の生徒会の三人とみぽりん！

『今日ここに出演してくださったのは、じゃん！　二十年ぶりに戦車道を復活させ、いきなり全国大会の準決勝にまで進んだ、我が校の戦車道チームのみなさんです！　まずは、快進撃おめでとうございます！　では隊長を務める二年生の、西住みほさんから一言どうぞ！』

「え……あ……その」

ってみぽりんたら、もーたじたじ。せっかく羽織ってきたジャケットも、まるで威厳が出てないよー。
まあ、普段のみぽりんらしいんだけどね。
だからかわりに、さっそくマイクを河嶋先輩がひったくったよ。
『準決勝ということは、ベスト4だ！　だが我々の目指すところは優勝のみ！　……細かいことは今更言わん！　私が言いたいのは……学園を守る使命を持った者、きたれよ！　ということだー！』
『あー、桃ちゃん。それじゃわかんないから……』
横からゆるくツッコミを入れたのは、小山先輩。
……テレビに映る小山先輩の胸も、やっぱり存在感あるよ……！
『も、桃ちゃん言うな!?　柚子ー！　しかも校内放送で!?』
『はいはい。ええと、わたしたちは準決勝に向けて、戦車道の追加メンバーを募集しています。戦車は、一人では動かせません。興味がある方は親しい人を何人か誘って、ぜひ一緒に参加しましょう。初心者でも大丈夫。生徒会の指導のもと、手取り足取り、懇切丁寧にレクチャーしますよ』
怒る河嶋先輩をあしらって、小山先輩が説明した。
そうなんだよね。
この放送は生徒会が考えた、人員増強作戦なの。
『今ならもれなく、このビッグウェーブに乗れちゃうよ～。乗るしかないよー』

最後に、会長さんが締めくくった。
みぽりんはその横で、ずっと目を泳がせてるだけで。――やがてテレビは『これまでの活躍を映像にてご紹介します！』と、戦車の映像に切り替わった。

「あ、あうっ……！」

そんなテレビ映像を見てたみぽりんが、顔を真っ赤にしてチョココロネを囓る。
恰好はパンツァージャケットから、私たちと同じセーラー服に戻ってるよ。
実は今のは、録画映像なの。そして今、私たちⅣ号戦車のあんこうチーム五人は、六台の戦車が並ぶ倉庫前でお昼してた。
「だーいじょうぶ、みぽりん！　かわいく映ってたよ？」
再塗装して、専用のマークまで入った戦車たち。
その乾燥のため甲羅干ししてるんだけど、Ⅳ号は両サイドのあんこうマークだけだから。その上にみんなで登って、私は納豆コーヒーゼリーサンドを食べながら、一応みぽりんをフォローした。
変わり種のサンドイッチだけど、意外とおいしいのよね、これ。……それに納豆は美容にもいいし！　あーん。
「うーん、やはり西住殿の神髄は、戦車道での采配ぶりにありますから。インタビューもいいですけれど、ほら！　ここはやはり、試合の中で指揮を執る姿を、流すべきだと思うんです。はい！」

私たちの中で一人だけ、自宅から通うゆかりんは、お弁当派だった。Ⅳ号に腰掛けた膝の上にあるのは、ゆかりんのお母さん特製、海苔で戦車の形をつくったキャラ弁だよー。

思わず私、ケータイで写真撮らせてもらっちゃった！

だってほんと、豪華だもん～。

そのゆかりんの傍らに、彼女が持ってきたポータブルテレビがあった。

いつなにがあるかわからないから、いろいろ常備してるってことだけど。さすがは通学鞄にしては、大きなリュックを背負ってるだけはあるよ、ゆかりんは！

「ああ！　だからもっと、ちゃんと解説してくれないとー！　ううっ、これいつ撮ったんですか～？　あらかじめ言ってくれれば、ワタシも付いて行きましたのに！　戦車の解説くらいしましたのにー！」

流れてる試合の映像を見て、そのゆかりんは興奮してた。あはは。

にしてもこのテレビ、小型で、ケータイの三倍もない画面だけど……けっこう鮮明に映るのよね。

訊いてみたら、「学内放送は、周波数帯域が広いですから！　放送委員が無線の免許を取って、いい電波飛ばしてるんですよ」だって。

ふーん。私にはよくわかんないけど、無線を飛ばすのに免許がいるなんて、初めて知ったよ！

戦車の通信も無線だけど、あれはなんか、特別に一番遠くまで飛ばない電波だけ無免許

でいいんだって。
あー、だからこの間の試合、雑音ばっかり混ざってたんだ。
「これ急遽、朝のホームルーム前にみほさんが連れていかれて、撮ったものなんですよ」
私やみぽりんと同じクラスの華が、ピザトーストを食べる手を休め、言った。
……それはそうと、いつも思うけど、華ってすごすぎ。
だって、さっきはフランスパンを一本食べてたし！
それでいてがっつくわけじゃなくて、上品に食べ切っちゃうんだもん。
うっ、今時の男子は「もう食べられなーい！」なんて女子より、健康的な華みたいなのがいいのかも⁉
うああっ。けど、けど！　食べても太らないタイプの華と違って、私はダイレクトにきちゃう体質だからー！
せ、せっかく戦車道で痩せたんだし、今の体重キープするよっ。
というか華がほんとにすごいのは、ちょこんと女の子座りしたその横、戦車の大砲の付け根に――まだ中身の入った、購買部の紙袋を置いてたことだけど……。そっか、足りないんだ。ごくり。
ただし、麻子がそれを狙ってた。
「……よかったら少し分けてくれ」
午前中の授業をサボってⅣ号で寝てた麻子が、ひょこっと頭を出して頼む。
一緒にお昼しよっ、てメールしても返事がなくて。

たまたまⅣ号のところで集まって、こうしてわいわいやってたら、いきなり顔を出したのよねー。
それでいてまだ眠かったらしく、さっきまで「ふわ」とあくびを噛み殺して、Ⅳ号内に戻ってたんだけど……どうやらそろそろ、お腹の虫が騒いだのかな？
もちろん麻子は、華に交換条件を出した。
「借りは返す。放課後、アイスでもおごるから」
「あら。いいですよ。わたくし、いつもたくさん食べますし」
どれ食べます？　なんて華が、紙袋の中をあさった。
……うわぁ。焼きそばパンにカレーパン、それにメロンパン！　お、お腹にたまりそうなパンばっかりじゃん！
「ありがとう。じゃあ、これを」
あー、麻子ってば、甘い物好きだもんね。当然の選択かも。
麻子はメロンパンを選んだよ。
——でもさ、麻子ってば。
「またサボりだなんて。もー、朝には強くなったんじゃないの？」
「遅刻の回数は減ったぞ。……でも午前中は、やはり眠い」
すすすっ、ともらったメロンパンを手に、麻子はⅣ号の中に引っ込んでく。
あ、あのねえ。
「ちゃんとしないと、おばぁに言い付けるよ！」

私はつい、切り札を出した。
びくん！　って引っ込みかけた麻子の頭がそこで止まる。
ちょっと青ざめた顔で、戻ってきて。
「……それは困る」
うん。麻子ってばほんと、おばぁには弱いのよね。
その様子に、さっきまでへこんでたみぽりんが、くすりと笑った。
「冷泉さんのお婆さんって、そんなに怖いのかな？」
「みたいですね」
華も、特になにも知らないからそう返す。
あっ、え、えーと。
どうしよう？　私はつい、うろたえちゃう。だって……麻子の家庭の事情を知ってたから。
でもそれは、私が誰かに、説明していいことじゃなくて。
「おばぁだけだからな、私の身寄りは」
だからふいにぽつりと語ったのは、麻子本人だった。
え、えええ？
はっ、とみぽりんや華が息を呑む。
んぐ！　ってご飯を詰まらせたのは、ゆかりんだよ。
「い、いいの!?　麻子！」

「別に、事実だ。隠すことじゃないし。両親が小学校の頃、事故でな……」

麻子一人を残して、ご両親は亡くなった。それは幼なじみの私だって、触れようとしない現実。

だけど、麻子がそれをあえて口に出したのは――。

「西住（にしずみ）さんは、大丈夫なのか。親と、姉と……離れて一人で、大洗女子（おおあらいじょし）に来て」

「えっ。そ、それは……」

みぽりんを真っ直（まっす）ぐ見つめて、麻子が訊（き）いた。

あ……そっか。麻子ってば。

心配してたんだよね、みぽりんのこと。

そういえば私が、戦車道の抽選会でみぽりんがお姉さんと会ったとき、ぎくしゃくしてたの話したときから。

「ちゃんと話をしておいた方がいいぞ。私は、もうできなくなってしまったから」

「……冷泉（れいぜい）さん」

ぎゅ、ってみぽりんが食べかけのチョココロネを握りしめた。

やがてこくん、と一つ頷（うなず）く。

うん。家族とケンカすることって、あるよね。

私も妹の詩織（しおり）と、いつもはすっごく仲いいけど、たまーにすれ違ったりするしさ。

でも、姉妹だもん。仲直りできるよ、絶対！

って私は言おうとしたんだけど。

その前にむにゅうって、みぽりんの手の中から、コロネのチョコが押し出されて――わわわっ！

「ああっ、みぽりん！　制服、制服汚れちゃうよっ⁉　ティッシュティッシュ！」

「へ？　……はわわわっ‼」

みぽりんがわたわたして、いっそう手をチョコで汚した。

み、みぽりーん⁉

†

「では74アイスでも食べに行くか」

放課後、倉庫での戦車の整備が終わったとたん、意気揚々と麻子(まこ)が言うよ。

――まだ日も傾いてないけど、今日はもうおしまい！

私たちあんこうチームだけじゃなくて、他のメンバーも作業を終えて、帰り支度を始めちゃう。

準決勝まであと数日だけど、もちろんちゃんと理由があった。練習しないんじゃなくて、できないの。

だって今日、Ⅲ突とⅣ号戦車の履帯(りたい)をみんなで外しちゃったんだもん。

そして明日には、なんか……「うぃんたーけって」って名前の履帯が届くから、交換待ちなんだよね。

それは雪や氷の上を走れるようにするための、特別仕様なんだって！　全部の戦車が交換できるわけじゃなくて、Ⅲ突とⅣ号だけなんだけれどさ。

なにしろ今度の準決勝は——北にある、雪の中で試合をするの！

おかげで学園艦も会場目指して、海をずんずん北上してるみたい。

そういえばだんだん肌寒くなってるのよねー。そのうち雪も降ってきそう。それを見越しての、交換なの。

「って麻子、寒くなってきてるのに、アイスなわけ？」

私はついぶるりとしたよ。

うー、だって冷え性なんだもん！　女の子だからさー。

明日からはもっと冷えてくるだろうから、クローゼットからコート出してこなくっちゃ。

でも、私以外は平気そうで。

「あったかーいアイス屋さんで、冷たいアイスクリームを食べる……。それって、至高の趣ですね！」

おごってもらうの確定な華が、にこにこと鞄を持って麻子に続いた。

「今日はなに味にしましょうか。わたくし、悩むところです。みほさんは、やっぱりチョコのリベンジですか？」

「あ……うーん。どうしよう。って、わたしいつもなかなか決められなくて。あは、は」

「７４アイスはトッピングやフレーバーが豊富ですから、仕方ありません！　ベースはほ

とんど、サツマイモアイスですけどね」
みぽりんもゆかりんも、どうやらアイスでＯＫみたい。
やーん。私もこうなったら、チョコチップ入り食べるぅ～。
けど、そのとき。
「あの。あんこうチーム通信手の、武部さん？　ちょっと」
なんか、いきなり声をかけられた。
へ？　私？
学生鞄代わりのトートバッグを持ったまま振り返れば、そこに小山先輩の姿が。
ほえ？
「相談したいことがあるので、少し残ってくれませんか？」
「えっ。はーい」
……あの大きな胸で頼まれたら、ちょっと断れないよね？
って、でも、相談？
私なんかに、なにを？
「それって……戦車のことですか？」
「え、ええ」
「みぽりん、じゃなくて？」
「はい」
小山先輩は「こっちへ」って、倉庫の中へと手招きする。

「武部さん、みんなで待ってようか？」
みぽりんが困惑しながらも、そう言ってくれた。ううん、寒くなってきたのにみんなを待たせるなんて、悪いよー。
「ごめん、先帰ってて。終わったらメールするから、アイス屋にいたら、後で合流するね！」
私はウィンク一つ返して、「じゃあ」と別れて倉庫に入った。
「来たか」
そして私を待ってたのは、河嶋（かわしま）先輩だったよ。
ううん、会長さんもいた。
生徒会三役と私以外は帰っちゃった倉庫の中で、新戦車ルノーの中から顔を出す。
「おっ、悪いね。急に呼んじゃって〜。いや、たいしたことじゃないんだけどさー」
ほら。と、会長さんがぺんぺんルノーを叩（たた）く。
「確かうちの各チームの呼称、決めたのって武部ちゃんだったでしょ？　でさ、こいつにもなんか適当なの付けてよ。まだ人員そろってないけどさ〜」
「え？　あ、そんなこと？　えーと」
そう、私が各チームの呼び方を決めたのよね。
それは戦車の中で使う、味方を示す、マグネットのデザインに合わせたもの。
……トートバッグからごそごそとペンケースを取り出して、私は余ってたマグネットを見つけ出す。

ええと、ルノーはなんか、形状が——。
「カモっぽくないですか?」
ほら。と私はカモのマグネットを見せたよ。
うん、間違いない!
形がなんか、カモそっくりだもんー。
「じゃ、カモに決定~」
会長さんもあっさり決めちゃう。
あ、もう終わりかな?
それじゃあ——って、私はもちろん倉庫から出ようとした。だって今ならすぐ、みぽりんたちに追いつくもん。
でも。
「あー、武部ちゃんストップ」
「こら! まだ会長の用事は終わってないぞ?」
会長さんと河嶋先輩に引き留められた。
え、え?
だけどなぜか会長さんが、「うーん」ってしばらく思案して。
「……ねー、武部ちゃん。あんこう鍋、好き?」
やがて、唐突にそんなことを言ってきた。
は、はいい?

「寒くなってきたね～。お、もうできたかなー」
会長の角谷先輩が、ぐつぐつ煮えるあんこう鍋の蓋を取った。
「そろそろ緯度五十度を越えますからね」
視線を上げて、窓の外に目を向けたのは小山先輩だよ。
ここは大洗女子学園の、見晴らしのいい校舎四階の角部屋。そこに設けられた、無駄に広い会長室だった。
外は薄暗くなってきてたけど、窓からどこまでも広がる海が見えた。
五十度って、もしかしたら北海道より北になるのかな？
ただ、あの。そんな外の景色より……私は雰囲気が一変した、会長室の様子に呆れてた。
だって、だって！
しゃれた応接間みたいな感じだったのに、私が呼ばれたときには机がどけられて――厚手の絨毯の上にコタツが置かれ、そこにカセットコンロと、お鍋が用意されてたんだもん～！
「まったく、試合会場をルーレットで決めるのはやめて欲しい」
フライトジャケットを羽織った河嶋先輩が、ドテラを持ってきて会長さんや小山先輩、そして私に「はい」と勧めた。
え、えーと。

部屋の中も冷えてたから、コタツに足を突っ込んでたし、もちろんありがたく受け取ったけれど。

「……あの。ですから、話ってなんですか?」

ドテラに袖を通しながら、私はそう、何度目かになったかわからない問いかけをした。

だけど――。うぐっ、って生徒会の三人が、黙っちゃう。

あーもう、またこの反応?

なにか言おうとしてるのはわかるんだけどね。

「まぁまぁ、あんこう鍋、食べてー」



「そ、そうです。話は食べながらゆっくりと……会長の作るあんこう鍋は絶品なのよ？」
会長さんが鍋奉行をして、小山先輩がお皿とお箸を配ったよ。
うん、確かに……さっきからすっごくいい匂いだもん。
だからつい私としては、将来おいしいお鍋をカレに作ってあげるために、あんこう鍋の出来具合に気が行っちゃうわけで。
——真っ先に口を付けるのも、仕方ないよね？
って、ふわぁ～⁉
「！　おいしい！　なにこれっ。お出汁が、すっごくよく出てるー！」
「あ。わかる、武部ちゃん？　まず最初にね、あんきもをよく炒めるといいんだよ」
にかっ、と会長さんが歯を見せた。
「そこへ味噌を入れて……。この味噌がまたポイントなんだけどさ～」
「いや、会長。鍋の作り方はいいですから」
そろそろ……。といった感じで、ついに河嶋先輩が切り出した。
だけどやっぱり、会長さんは黙っちゃう。
うーん。思い切りが足りないみたい？
だから、なのかな？
小山先輩が話を逸らすように、ふいにコタツをとんとん叩いた。
「武部さん。コタツ、熱くない？」

「え？　いえ、平気です」
……。私はむしろ、コタツの天板にのっかる、小山先輩の胸に目が行っちゃうよー。
ほんと、魔性の胸だよ⁉
こんな体勢で見つめられたら、きっと男子ならイチコロなんだろうなぁ。
だけど小山先輩は私じゃなくて、会長さんの方を見てた。
「これ、わたしが予算をやりくりして買ったんですよね。バザーとかで安いのを見つけて。他にもいろいろ買いましたよね、会長？」
「あー、うん。冷蔵庫とか電子レンジとかホットプレートとか」
会長さんがちらり、と奥の扉に目を向けた。
うん？　あっちは会長室と繋がる、生徒会室だよね。あー、そこにコタツやカセットコンロとか、いろいろ置かれてるのかなぁ。
「体育祭や合唱祭や学園祭の前には、ここでよく寝泊まりしましたしね。去年はカレー大会もしましたし」
生徒会室からドテラを持ってきた河嶋先輩が、うんうんと頷いた。
あ、それ覚えてる。
だって私も、クラスのシーフードカレー作り、手伝ったもんっ。
それに確かあのイベントで、華と仲良くなったんだっけ。「おいしいです！」なんて、何杯もおかわりしてくれてさ〜。
「その前は、仮装大会もしたし、夏には水かけ大会も。泥んこプロレス大会なんてのも」

「？　え、そんなのあったんですか？」
「あ、わたしたち、一年のときから一緒に生徒会やってるの」
小山先輩が説明した。
はー。じゃあ、私が入学する前の話なんだ。ふぅん。
生徒会の三人って、昔からほんといろいろやってたんだね。戦車道なんてのも、突然始めちゃったし！
だけど小山先輩たら、「でも」って急に言いよどんだ。
「……。もう、それもできなくなっちゃう。わたしたちの後輩に託したくても……無理だから」
はい？　唐突な一言に、私はきょとんとしてしまった。
だって意味がわかんないもん。
だから、ようやく会長さんが重い口を開いたよ。
「武部ちゃん。あのね。……この大洗女子学園は、今年度いっぱいで廃校になっちゃうかも、なんだ」
「えっ」
なに……？
私は一瞬、なにを言われたのか理解できない。
ぐつぐつ煮えるあんこう鍋を取り囲む、生徒会の三人を見回した。
冗談でしょ？　って笑いたかったけど――ダメ。

誰もが、泣きそうな顔してた。

嘘……。ほ、ほんとに？

「って、えええええええ？　は、廃校って、そんな――!?　ぜんっぜん知らないですよ、それ！」

「地方紙には『統廃合の可能性が』なんて記事が載ったこともあるんだ……。学園艦は維持費も運営費もかかるから、全体数を見直すって。生徒はほとんど寮生活だし、新聞を読まないから、知らないだろうが」

ぽつりぽつりと、河嶋先輩が言う。

その肩はいつしか震えてた。

そして、ついに涙が片眼鏡を濡らす。

「それに、廃校の第一候補にうちが上がってるなんてことも。しかも来年度には、って話で……も、もうダメだよ、柚子ちゃぁあん！」

わっ！　と河嶋先輩が泣き出した。

いつもの強気な態度からは、まったく考えられない様子に、私はもう呆然としちゃう。

よしよし、なんて小山先輩が抱きつかれて、河嶋先輩の頭を撫でてた。

だけど一人、角谷会長だけはコタツに入ったまま、ぴしりと背筋を伸ばしてた。

「まだ、わかんないよ。そのためにさ、戦車道を始めたんだから。西住ちゃんがいればきっと、優勝できるよ。ううん、優勝しなきゃ。でないと廃校の決定なんて、覆せないいん

だからさー」
にこっ、と会長さんが私に笑った。
「だってさ、まさか優勝校を廃校にはしないよね～?」
「え。いえ、そうかも、だけど……でも」
どうして?
混乱する私の頭に、ある疑問が浮かんでた。
それは……。
「あのっ、なんで私に言うんですか?　わざわざこんな、あんこう鍋まで用意して⁉」
そーだよ!
ぜんぜんわかんないー!
「だって打ち明けるなら私なんかより、みぽりん……西住さんとかの方が適任でしょうし!」
「うん。ほんとは西住ちゃんに伝えるべきなんだけどねー。でもほら、彼女は転校してきたばかりだから」
なかなかね、と会長さんたらコタツに小柄な体を埋めた。
「……絶対に言わなきゃいけないこと、なのは間違いないんだけど。いきなり重荷を背負わせて、萎縮するより、ノビノビ試合して欲しいからさ～」
「あ……」
そういうこと?　私は少し、納得する。

共感したのはみぽりんへの配慮、だよ。確かにこんなこと打ち明けられたら、動揺するよね。
せっかくみんなと、活き活き戦車道やってるのに――。
「だからさ、武部ちゃんにしたの」
だけど次の言葉は、まったく納得できなかった。
「ほら、武部ちゃんってさ、なーんとなくあんこうチームのムードメーカーっぽいっしょ？　でさー、頃合い見計らって西住さんにも話しておいてくれない？　うんうん、じゃあ頼んだ！」
「は、はいいいいい？　それって、ま、丸投げじゃないですか⁉」
「そうとも言う」
悪びれもせずに会長さんが断言した。
河嶋先輩を泣き止ませた小山先輩も、うんうんって頷くし。
あ、あのねー！
「というかもう聞いちゃったんだし、逃げらんないよ～」
「う、ううう……はめられたあぁぁ」
これで二度目だよ？　最初は戦車道の指導教官が女の人なのに、イケメンだって騙したし！
「タイミングは任せるからさー。んじゃ、そーゆーことで。ほら、遠慮せずに食べて食べて」

そして満面の笑みで会長さんたら、私のお皿に鍋の具をてんこ盛りにした。
そっか。このあんこう鍋って、押し付けた代償ってことで。
——食べるよ。食べますよーっだ！　遠慮なく！
だって、食べないだけ損だもんっ。
うー、おいしいのがまた、腹が立つよう。絶対太るし！
でも、でもでも、どうしようー⁉

††

タイミングを見て、とか言われても……いったいいつ、話せばいいわけ？
メールや電話で、なんてもっての外だし。
ううん、それ以前に会長さんが心配したとおり、今はみぽりんには戦車道に集中して欲しいし。
——なんて思ってるうちに、もう準決勝は明日だよ！
「武部さん？」
ほんとに、どーしよー！　タイミングとかの問題じゃないよ、こんなの？　うーんうーん。
「？　武部（たけべ）さん、ってば」
「へ？　……わ、わひゃあっ？　み、みぽりん⁉　いたの！」

私は跳び上がるほどびっくりした。
いつの間にそこにいたのか、セーラー服に丈の短いコートを着たみぽりんが、カイロを持ってきょとんとしてた。
ううん、最初からいたんだ。私がぼーっとしてただけで。
この場にいるのはみぽりんだけじゃないよ。華（はな）も、ゆかりんも、麻子（まこ）も――一年生やバレー部に、歴女（れきじょ）さんたちだっている。
試合を明日に控えた今日、私たち戦車道受講者は全員、放課後にいつもの倉庫前に集められてた。
そしてみんなで取り合うのは、生徒会が調達してきた、防寒具の数々だよ。
段ボール箱に詰められたそれらを、チームの人数ぶん、分けてたとこ。
だからみぽりんが「はい」って、私のぶんのカイロを差し出してくれたんだよね。
「あ、ごめん。カイロ、ありがとー……って、こんなに？」
私はどうにか誤魔化（ごまか）しつつも、どっさりともらったカイロに困惑した。
でも、みぽりんたら平然としてて。
「うん。戦車の中は暑苦しいくらいだけど、鉄の塊には違いないから。寒冷地での戦闘だと、すごく冷えるよ」
「そ、そうなんだ……」
だからこそ被服科（ひふくか）が、パンツァージャケットの上からでも羽織れる、コートをつくってくれたんだけどね。

学園艦がもうかなり北上したせいで、風はすっかり冷たいよ。私もみんなもみぽりん同様、ジャケットと同じカラーのコートを着てた。

というか、空もどんより曇ってて、まるで雪が降りそうな感じ。

そーだよ。とにかく今は、明日の試合のことだよね！　いちいち悩んでる場合じゃなかったっ。

ええと。

「あ、そーだ。後で毛糸のパンツも買いに行かない？」

「えっ。そんなのも用意するんですか？」

気を取り直した私の提案に、華がちょっと面食らった。

あれ、そんなに不思議かな？

「戦車の中って座布団してても、お尻冷えるもん。冷えは女の子の大敵でしょ」

ねえ？　って私はつい、隣でさっそくカイロを一つ開封した麻子に訊いた。

「麻子もいるよね、毛糸のパンツ」

「おばぁに編んでもらったのがあるから、いい」

すると麻子ったら――ちらり、とセーラー服のスカートをまくったよ。

ひゃあ、大胆！

……って見えたのは、パンツの生地じゃなくて、濃紺色の毛糸だった。うわ、もう履いてたんだ⁉

はー、無駄にどきどきしたあ。

「毛糸のパンツもいいですけど、もっと他のも用意しておいた方がいいですかね？」
そんな騒ぎにたまたま背を向けてたゆかりんが、のんびりと言った。
彼女が見てたのは、集まってた他のチームのみんなだよ。
そうそう、防寒具対策の話をしてるのは、もちろん私たちあんこうチームだけじゃなくって。
「タイツ二枚重ねにしよっか」
「レッグウォーマーもした方がいいよね」
一年生の六人が、あったかソックスやタイツを手にしてはしゃいでた。
「それよりリップ、色のついたのにした方がよくない？」
「準決勝ってギャラリー多いだろうしね」
「チークとかも入れちゃう？」
なんて、参考になる話までしてる。おおお？
うっ、私も気合い入れないとー！
一方、まるで方向性が違うのは、歴女さんチームだった。
「どうだ！」
いつも赤いハチマキをしてる、戦国歴女の「左衛門佐」さんが、ちょんまげカツラを手にしてた。え、えええ？
そこに対抗するのはローマ歴女の「カエサル」さん。
「わたしはこれだ！」

って、葉っぱの冠？　月桂樹ってヤツかな。
ど、どこで売ってたの？
というかそもそも防寒具じゃないし、なんて思ってたら。
「あなたたち、メイクは禁止！　仮装も禁止‼」
ぴぴー！　なんて笛の音に続いて、そんな怒声が轟いた。
一年生と歴女さんたちを睨んでたのは、おかっぱ頭の女の子。
――そう、急遽今日から戦車道の追加メンバーになった、風紀委員チームの一人だよ。
あの放送が効いて、風紀委員から三人も入ったの！
そして怒鳴ったのはそのリーダーになった、ええと。
確か麻子とは同じクラスで、それでいていつも遅刻する麻子とは、相容れないコ。名前は……。
「ソド子」
ぼそり、と麻子が呟いた。
「そこ！　冷泉さん、名前を略さないで！　わたしの名前は園みどり子なんだから！」
わ！　耳いい～。離れててもばっちり聞いて、園、園……ソド子さんが鋭く睨んだ。
ところで、麻子。あのさ、私の後ろに隠れるんだったら、そもそも言わなきゃいいのに。もうー。
だけどソド子さんの今の標的は、麻子じゃなくて。

「いちいちうるさいぜよ」
コートの上から浅葱色の羽織を着た、新撰組歴女の「おりょう」さんがついぼやいた。
その手には、袴なんか持っちゃってる。
もちろんソド子さんたら、いっそう怒った。
「それもダメー！　これは授業の一環なのよ！　校則は守ってもらうわ！」
だけど歴女四人組の最後、ドイツ歴女の「エルヴィン」さんたら、新しい軍帽を装着して不敵に笑った。
「自分の人生は、自分で演出する！」
「……なに言ってるのよ！」
うん、私も、なに言ってるのかわかんない。
でも、それが歴女さんたちだからねー。むしろ、ときどき素敵にかっこよく見えるときもあるし？
そんな騒ぎを尻目に、いつもの調子なのは元バレー部チームだよ。
「今度はけっこう、みんな見に来ますよ」
「戦車にバレー部部員募集って、書いて貼っておこうよ！」
購買部の紙袋から取り出してくるのは、何本かのカラーペンだった。
「ここまでくればバレー部復活も近い！　四人だけの不完全チームよサヨウナラ！」
「九人制も夢じゃないな！」
「ファイッ、オー！」

……うん、ほんと、普段のノリだ～。

いいな。ちょっとうらやましくなる。

だって私はこうしてても、やっぱりどうしても、「廃校」の件が頭から離れなくて。

いつ、言ったらいいんだろ？

ちらり、と横にいるみぽりんを見ちゃう。

だけど――。

「十五輛対六輛……。あっちはT―34／76・85にJS―2、KV―2。こっちはⅣ号とⅢ突……」

みぽりんが、一枚の紙切れを手にぶつぶつ言ってた。

あれはさっきカイロと一緒に会長さんから渡された、明日の試合の、敵側のスペックシート？

そこに書かれてる内容は、私にはよくわかんない。みぽりんが呟いてることだって、さっぱりだもん。

けど、雰囲気はわかる。勝つのが、相当難しい相手だってこと。

それと……十五対六って、圧倒的に数でも負けてるってのも。

勝てる、の？

不安がどうしても、胸を押し潰してくる。

「どうした、沙織」

ふと、麻子が私に声をかけた。えっ？

勘付かれた？　華(はな)やゆかりんは、「？」って顔してたけど。
……幼なじみだもんね、麻子とは。
でも、だからこそ。それ以上訊(き)いてはこない。
「ううん。なんでもないよ」
私がそれだけを告げると、もうおしまい。
麻子は余計なことまで突っ込まないから。それが、私と麻子だけの距離感だもん。
いつか、そのうち……。
私が決めたときは、ちゃんと麻子には話すからさ。ごめんね。
心で謝って、私はわいわいと楽しげな周りを見た。アンツィオ高校に勝ってから、みんな上り調子なんだよね。
それを、なにより今は邪魔できないから。
「明日……勝たなきゃね。うん！」
今考えるのは、それだけにしとかないと。
私は自分に言い聞かせて、気合いを入れた。

3 強敵！ プラウダの罠、だよ！

翌日――学園艦は私たちの戦車を、見渡す限りの雪原に降ろした。
……もうね、ほんっと、真っ白なの！
幸い吹雪いてはいなかったんだけど、叩き付ける冷気はハンパなくって――。
「さむっ！ マジ寒いんだけどぉお～」
並んだ大洗女子チームの、六台の戦車たち。その前で、私は手袋をはめた指をにぎにぎさせ、雪をばたばた踏みしめて暖を取ったよ。
ううう～、パンツァージャケットの上からコートを着てるし、タイツだって重ね履きしてるのに冷えるー！
もちろん私だけじゃなくて、あちこちでみんな、白い息を吐きながら体をさすり合っていた。
「こんなところで試合やるんですかぁあ～」
私と同じく声を震わせるのは、華だよ。せ、戦車の中に入れば、風くらいは防げるから少しはマシかも？
ううん、さっそく我慢できずに一年生が、雪合戦を始めてた。
歴女チームは、力を合わせて戦国武将っぽい雪像なんかつくってるし。い、いつの間に？ うわー。

そんな中でも黙々と戦車のチェックをしてたのは、みぽりんだった。
「ラジエーターに不凍液も入れたよね？」
って、六台ある戦車をいちいち回りながら、各チームのリーダーに確認を取る。
そうやって自然と、今回が初試合となる、風紀委員のカモさんチームにも声をかけた。
「あの。いきなり試合で大変だと思いますけど、落ち着いてがんばってくださいね」
「わ、わかってるわ」
だけどソド子さんたら、ガチガチっぽい？
あー、それはきっと寒さのせいだけじゃないよね。後ろに控えた風紀委員の後輩二名も、一言も返せないくらい緊張してた。
だから、なのかな。
麻子（まこ）がすすっと、ソド子さんの方に近づいて。
「わからないことがあったら、無線で質問してくれ。沙織（さおり）を通して教えてやる、ソド子」
「！　だから、気安くソド子って呼ばないでよ！　わたしの名前は園（その）みどり子なんだってば！」
「わかった、ソド子」
「もう！　ぜんぜんわかってないじゃないのよ！」
ソド子さんがぷりぷり怒る。
でも、緊張は忘れたみたい？
……へー。やるじゃん、麻子！

遅刻魔と風紀委員の二人だから、仲が悪そうに見えるけど、私はそんなことないと思う。

ソド子さんは麻子のこと心配して、遅刻が多いのを叱ってるし……それを麻子も知ってるっぽいんだよね。うん！

——怒りすぎたソド子さんが、他の風紀委員のコに「暴力はダメです！」って取り押さえられたけどさ。

なんてことをやってると。

そ、それは見なかったことにするよ……。あは、は、は。

「……あれは！」

急に声を上げたのは、ゆかりんだった。

え、なに？

彼女の視線の先を追って、私も気付く。

雪原の向こうから、一台の車がやってきたの。

戦車？　ううん、ごついタイヤの、無骨なトラックみたいなの！

トラックは私たちの前で止まって、ドアが開く。

そこからぴょん、と誰かが飛び降りた。

一人？　あ、二人だ。耳当て付きのヘルメットをかぶったすごく背の低いコと、真っ白な肌と黒い髪が印象的な、背の高いコの組み合わせだよ。

二人が着こなすのは、ダークグリーンの制服だった。

背の低いコが厚手のだぼっとしたヤツで、もう一人は黒ベストとの重ね着だけど……あれって、もしかして対戦相手の？

「プラウダ高校の、隊長と副隊長……」

みぽりんがぼそりと言った。

「『地吹雪』のカチューシャと、『ブリザード』のノンナですね！　ちっちゃい暴れん坊と、進撃の大巨人！」

さらにゆかりんが補足する。

え、えええと。背の低い方が隊長さんで、逆に高いのが、副隊長さん？

二人はなにしに来たんだろ。背の低い隊長のカチューシャさんが、歩きながら私たちの戦車を見回す。

そして、ふいに「ぷっ」と吹き出した。

「うふふ、あはは……！　このカチューシャを笑わせるために、こんな戦車、用意したのね？　ね？」

え、なっ？　いきなりけらけら笑い出されて、私たちはぽかんとしちゃう。

いや、確かに……私たち大洗女子の戦車って、数少ないし、寄せ集めでしかないんだけどさ。

だけど、ちょっと失礼じゃない⁉

なんて、つい誰もが身構える中——ひょい、と前に出たのは生徒会長さんだった。

「やぁやぁ、カチューシャ。よろしく〜、生徒会長の角谷だ」

会長さんは気さくに右手を差し出した。思わずカチューシャさんも、握手を返そうと反応する。
でもその前に、ふいにぴたりと動きを止めた。
カチューシャさんは、じろじろと角谷先輩を見る。あ……ほ、ほんとにちっちゃいや。
こっちのチームの中でも、かなり小柄な会長さんと並ぶから、よくわかる。
だってカチューシャさんってば、角谷（かどたに）先輩をちょっと見上げちゃってるもん。
だけど、どうやらそれが気にくわなかったみたいで。
「ノンナ！」
突然、後ろにいた長身の、ノンナさんを呼び付けた。
すると、え、えええ？
なんと……肩車されちゃった！
ようやくご満悦な顔で、ノンナさんの上からカチューシャさんがこっちを見下ろす。
「そうそう、こうでなきゃ！　あなたたちはね、すべてがカチューシャより下なの！　戦車も技術も、そして身長もね！」
「いや。……肩車してるじゃないか」
思わずぽつりとツッコミを入れたのは、会長さんの脇に控えてた河嶋（かわしま）先輩だよ。
うん、だよねー。
でもそれって、カチューシャさんには禁句だったみたい。
キッ、と河嶋先輩を睨（にら）んでくる。

「聞こえたわよ！　よくもカチューシャを侮辱したわね！　粛正してやる！　行くわよ、ノンナ！」



なんてぶっそうなことを言ってから、カチューシャさんは肩車されたまま、ノンナさんに運ばれていく。
ただ、トラックへと向かう途中――たまたま「あら」と、みぽりんを見つけてぱたぱたと足を振った。
それがたぶん、「止まれ」の合図だったのかな。
ノンナさんが無言で足を止め、カチューシャさんがじろじろとみぽりんを見下ろす。
「あなた、西住流の？　そっか、黒森峰から逃げ出して、この学校に来たんだっけ」
「……！」
みぽりんがびくっとする。
なっ、え？　くすくすと、カチューシャさんが笑ってた。
「去年はありがとう。あなたのおかげでわたしたち、優勝できたわ。今年もよろしくね、家元さん」
な……な、な、なに!?　今の、態度――――――！
あまりのことにみぽりんは硬直してたし、私たちも呆然としちゃう。
「ほんと、こんなのにやられた車輛は、全員シベリア送り二十五ルーブルよ！」
しかもよくわかんない台詞まで言うもんだから、みんな言い返すタイミングを失ってた。
「日の当たらない教室で、二十五日間の補習ってことですね」

ようやく、初めて口を開いたノンナさんの解説で、内容は理解できたけどさ。
「じゃあね。ピロシキ～」
「ダスビダーニャ」
って、また意味不明な言葉だけ残して、トラックに戻ってく。
ピロシキって、料理じゃん？　だすび、はなに？
……ううん、そんなことより、私たちは去っていくトラックを見ながら憤慨した。
「大丈夫ですよ！　あんなのに負けませんから！」
一年生の女の子たちが、真っ先にみぽりんを励ましたよ。
「こてんぱんにしてやりましょう！　ダブルスコアで！」
バレー部のコたちも怒ってた。
「討ちてし止まん！」
歴女のカエサルさんが、難しい言い方をする。
気持ちは十分伝わるよ。もちろん、私だって！
「あんな言い方しなくたって！　みぽりん、見返してやろっ！」
「リベンジですね！」
華も続いて、麻子も静かに頷いた。
だけど、ゆかりんだけはちょっと違って。
「昨年の優勝校だけに、ちょっと慢心してますね。でも、それだけの実力を持っていますから」

あ……。わいわい騒ぐ他のチームのみんなを余所に、私たちあんこうチームの面々は
はっとする。
そしてみぽりんは、最初から冷静だった。
「とにかく。わたしたちは、できることをするだけだから」
……そーだよ。
怒ってる場合じゃなくて、私たちは勝たなくちゃいけないんだから。

†

「隊長の西住から全車輌へ。……今回は、フラッグ戦となります。サンダースとの一回戦と同じですね」
試合開始まで、もう少し――。
私たち大洗女子チームの戦車は、スタート位置まで移動した。
と言っても、同じような真っ白な光景しか、周りにはないんだけどね。
それでもスタート地点を示す、赤い旗が立っていて、私はさっそくホワイトボード上の地図にマグネットを貼り付けた。
こっちが六つで、敵が十五。
……ううっ、やっぱり数が多いよぉ〜！

でもⅣ号の車長席に座るみぽりんは、落ち着いて咽喉マイクで指示を出してた。

「数が多くても、フラッグ戦なら勝ち目があります。とにかく相手の車輌に呑まれないよう、落ち着いて行動してください。こちらのフラッグ車である、アヒルさんチームの八九式を守りながらゆっくり前進して、まずは相手の動きを見ましょう」

うん、それは事前に取り決めておいたとおりのこと。

Ⅳ号内で、それぞれの席についた私も華も、麻子もゆかりんも「だね」って視線を交わらせる。

う～っ、それにしても戦車の中もやっぱり冷えるよ！　エンジンの熱で、外よりはマシかと思ったけど、鉄がキンキンになってるんだもん！

カイロがなかったら、やばかったよー。

通信手の私は隊長のみぽりんみたく、ヘッドホンつけてるから、耳はまだマシなんだけどね。

なんて思ってた、そのとき。

『こちらカバチームの、エルヴィン。隊長、妙案がある。カエサルとも話したのだが、ゆっくりよりも、ここは一気に攻めたらどうだろう』

そんな通信が私の耳に届いたよ。

え、え？

もちろん同じ通信を聞いてたみぽりんも、車長席で息を呑む。

「えっ。でも」

『先手必勝ですね！　……あっ、あたしたちウサギチームも同意見です～。ね、ね！』
そこに一年生からの声も混じった。えええええ。
「だけど、失敗したらっ」
もちろんみぽりんが反論するよ。
だって、真逆の作戦だもの。通信が聞こえない華（はな）やゆかりん、麻子（まこ）も異常に勘付いて、私やみぽりんを見てくる。
でも、他のチームたちの勢いは止（と）まらない。
『大丈夫ですよ！　なんだか負ける気がしないって、みんな。ねー』
通信手以外の声は聞こえないけど、どうやら一年生は勝手に盛り上がってるみたい？
そこに、バレー部のアヒルさんチームも加わっちゃう。
『アヒルチームも同意見です。敵（てき）はこっちのこと舐めてるから、その隙にぎゃふんと言わせちゃいましょう！　クイックアタックで！』
『ど、どっちでもいいわよ。カモチームのわたしたちは、足を引っ張らないようにするだけで精一杯だし』
新チームのカモさんチームからも、そんな返事が。
最後に締めたのは、カメさんチームの河嶋（かわしま）先輩だった。
『よし、それで決まりだな。勢いこそ大事だ！』
「ちょっ……みぽりん？」
どうしよう！

会話のすべてを聞いてた私は、つい振り返ってみぽりんを見上げる。
そうこうしてる間に、審判から『大洗女子、準備はいいですか⁉』って通信まで来た。
わ、もう試合、始まっちゃう？
だから。
「……こちら大洗女子です。審判、いつでもどうぞ」
みぽりんがそう返した。で、すぐに続けてチームのみんなに通達する。
「作戦変更！　一気に攻めます！」
わっ！　って受信機の向こうでは、声がわいたよ。
でも、でもでもっ、Ⅳ号の中は不安で包まれる。
「いいんですか⁉」
びっくりしたゆかりんが、装填手席から腰を浮かせた。
「慎重に行く作戦だったんじゃ……」
華も不安そうに、みぽりんを見た。
麻子は、みぽりんが決めたことだから、すっと前に向き直ったけど。
と、みぽりんが喉の首輪みたいにつけるマイクを外し、私たちだけに言う。
「みんなには言わなかったんだけど……プラウダ校は、とりわけ雪上での戦いに慣れてるの。戦車が寒冷地仕様だし、長引けば向こうが有利になるかも、だから。それに八九式の履帯は、雪上走行に向いてないから」
あ、そっか。

だからこそ今回、あえてフラッグ車を八九式にしたんだっけ？
他の戦車が動き回って、守れるようにって。
「なにより、みんなが勢いに乗ってるんだったら、きっとそれが一番だから」
少しだけ笑みを見せて、みぽりんは咽喉マイクを付け直した。
そっか……考えた末の決断なら、もう私たちに言うことはないよ！　うんっ。
そして――ついに、雲に覆われた空に、眩いほどの照明弾が上がった。
『プラウダ高校対大洗女子学園、試合開始！』
審判からの合図が来た。
みぽりんが、大きく息を吸い込んで――。
「相手は強敵ですが、がんばりましょう！　パンツァー・フォー！」
戦車前進、のかけ声とともに、私たち六台の戦車は動き出した。

††

ってなわけで、フラッグ車の八九式を守りながら、敵戦車目指してぐんぐん進んでいくわけだけども。
……白い。ほんっとに。
戦車の窓の狭い隙間からは、どこまでも続く白銀の世界だけが見えた。
って、今回の試合会場、広すぎ！

それに、なんだか雪まで降ってきたし！
「冷える……」
はぁ〜っ、て吐く息まで白いよ。ううう。
「一気に決着を付けるのは、正解かもしれませんね」
華が素手の右手に、はぁーって息を吹いていた。
なんか大砲を撃つとき、手袋してると邪魔なんだって。すごく気合い入ってる！
そんな中、ゆかりんが装填手席でごそごそしてた。
探ってたのは自分のリュックだよ。そこから取り出すのは、ありゃ。
もしかして、小型のポット？
「みなさん、ポットにココア入れてきましたよ。よかったら、今のうちにあたたまっておきましょう！」
「おっ。ゆかりん、ナイスじゃーん！　いいお嫁さんになれるよ？」
「……もらおう」
操縦している麻子が振り返りもせず、しゅぱって挙手で意思表示した。
「はい、ちょっと待っててくださいね！」
ゆかりんたら紙コップまで出してきて、かいがいしくみんなのぶんのココアを入れる。
うーん、甘ーい香りが戦車内に広がって、それだけであったまりそうだよ。
だけど「ありがとう」ってココアを受け取ったみぽりんは、硬い表情のままだった。
それどころか一人、頭上の鉄の扉を開けて、外にひょいと頭を出した。

視界の良くない車内より、目視で敵を見つける気なんだね。

『おそらく敵も一気にこちらを叩く策に出るはず。なら予想されるルートは……このまま、正面の丘陵へ！』

そして無線を通して、みんなに針路の指示を出した。

おっと、私もお仕事しないと～。

「麻子！　みぽりんが、真っ直ぐ目の前の丘陵へ、だって！」

そーだよ。みぽりんは隊長で、他の戦車のことも考えなくちゃいけないから。

Ⅳ号の「耳」になって、「手」の華や「足」の麻子に「頭脳」の意志を伝えるのは、私の役目なんだよね。

ココアを一気に飲み干して、麻子が真っ直ぐⅣ号を駆る。

受信機越しに『はい！』『了解っ』『丘を登りまーす！』って返事が来て、他の戦車も一緒に進むよ。

フラッグを掲げた、足回りの横に装甲が付いた八九式を中心に――私たちのⅣ号と、背の低いⅢ突が前を。左右を箱形の38tと、大砲が二つ付いてるM3リーが守ってた。

うん、たぶん。通信手席の窓からは、後ろはさっぱりわかんないけどさ。

そして最後尾には、カモっぽい形の新戦車、ルノーB1がくっついてるはず。

……と、思ってたら。

『きゃー！　滑る！　の、登らないじゃない！　なにこれ!?』

ふいに悲鳴が聞こえてきた。これって、ソド子さんの声？

「えっと、こちらあんこうチームです。今しゃべったのは、カモさんチームですか？」
確認するのは私の仕事。
すぐに『そーよ！　追い付けないから、待って待って！』って返ってくる。
『ソド子、なにしてる！』
通信に苛立ちをぶつけるのは、容赦ない河嶋先輩だった。
でもしょーがないじゃん。カモさんチームは、初陣になるんだもん。
初めてがうまくいかないことなんて、あるよね？　初恋と一緒だよー。
だから。
「雪の斜面にぶっつけ本番だから、カモさんが遅れてる……！　カモさんチーム、いったん後退して、立て直してください」
外に出てたみぽりんが後方を確認して、戦車内に戻ってきた。
そこで初めて麻子や華、ゆかりんも状況に気付く。
「……丘陵地の越え方は、ざっと説明しておいたのに」
ぼそりと呟いたのは、短期間でカモさんチームに操縦をレクチャーした、麻子だった。
「沙織。ソド子に、『真っ直ぐ登ろうとするな』と伝えてくれ。基本は、『回り道』だと」
「？　えっ。う、うん」
それでわかるの？　私には謎かけみたいに感じられたけど、そのままを無線にのせる。
「こちらあんこうです。麻子から、カモさんに言伝が。真っ直ぐじゃなくて、回り道して

登れってー」

『回り道……あっ！　ふ、ふん、そんなの最初からわかってるわよって伝えといて！』

元気なソド子さんの強がりが聞こえて、やがて――ひょこっとまた外に頭を出してたみぽりんが、「ちゃんと、坂を斜めに登ってきてる！」って声を上げた。

おおっ、やったじゃん！

だけど雪の丘を一つ越えたと思ったら、またその先にはこんもりと雪が傾斜をつくってた。

というか……今度のは、まるで壁のように立ち塞がってる？

これ、Ⅳ号でも通れるの？

ううん、麻子がゆっくりとⅣ号戦車を停止させた。行けない、って判断なのかな？

すると、みぽりんがゆかりんと華に指示を出す。

「秋山さん、りゅう弾を装填してくれる？　五十鈴さんは、前の雪を撃ってください」

雪を？　華はぎょっとし、ゆかりんはココアのポットを片付けて、きびきびと砲弾を装填した。

みぽりんには、なにか考えがあるんだろう。

だとしたら車長の指示に、私たちは従うのみ。

「では、発射します！」

ドーン!!　ってⅣ号の長砲身が震えたよ！

ばっ！　と白煙が舞い、白い雪の破片が飛び散る。

って、わわわわわ！

「す、すごいっ！　雪の壁が……なくなっちゃった⁉」

一発で、邪魔だった雪が吹き飛んで、視界が開ける。そこに現れたのは、真っ平らな雪原だよ。

「な、なるほど。これがみほさんの狙いだったんですね」

撃った華も、はあーっ、て目を丸くしてた。

「さすがです、西住殿～！　りゅう弾の短延期信管をうまく使っての、雪の爆破とは！」

ゆかりんがしきりに感心してた。

へえー、弾を換えたのにも、ちゃんと理由があったんだね。

でも。

『おい！　今のでこっちの居所がプラウダにばれたんじゃないか？』

河嶋先輩が、無線でそんなことをわめく。

あっ、そーだよ！

でも、みぽりんは毅然としてた。

「大丈夫。それも狙いだから。……敵と遭遇できないのなら、向こうから見つけてもらいます」

お、おおおー。

つまり、これも作戦のうちだったんだ？

――そしてみぽりんの思惑は、すぐに的中する。

「！　進行方向左斜め前に、影あり！」
双眼鏡を持って外に顔を出してたみぽりんが、真っ先に敵の姿を発見した。
それは通信にのって、もちろん全車に伝わったよ。
私たちⅣ号戦車内も、ついにって感じで緊張が走る。
「数は……三輌だけ？　外郭防衛線かな……」
みぽりんが敵の数を確認した、そのとき——遠くから砲撃の、音？
「！　撃ってきたっ？　あ、危ないよみぽりん！　中に戻って……きゃあっ！」
私が忠告したときには、近くで雪がはじけ飛んだ。
ち、着弾したんだ！
「大丈夫、この距離でこっちが動いてるなら、そう当たることはないから」
って、みぽりんはなんか余裕だったけど。ええー。や、やっぱり戦車道の家元の血筋、ってことなのかな？
それよりもみぽりんたら、冷静に指示を出す。
「向こうに気付かれました！　Ⅳ号と、Ⅲ突の長砲身を活かして狙い撃ちます！　カバさんとあんこう、砲撃用意してください！」
「了解ですっ！」
真っ先にゆかりんが動いた。
麻子がⅣ号を素早く停車させ、華が砲塔を回すよ。
そして合図は、隊長のみぽりんが出す。

「カバさんチーム、射撃！　あんこうチームも、撃て――！」
どどんっ‼　二つの轟音が重なった。
すると、当たった？
狭い窓越しに、白い世界に灰色の煙が見えて――。
『……プラウダ校、一輌が履帯損傷で行動不能！　さらにもう一輌が白旗！』
無線に審判のジャッジが入ったよ。
や、やったぁ！
「命中しました！」
嬉しそうにゆかりんがはしゃぎ、隣では華が長い息を吐きながら、満足げな顔をしてた。
っていうか、すごくない？
「一気に二台もやっつけちゃった！　いける、いけるよー！」
恋も戦車も電撃戦だよね！
もちろん、喜ぶのは私だけじゃない。
無線で『去年の優勝校を撃破しちゃった！』『うむ、時代は我らに味方している！』
『これはいけるかもしれん！』とか、みんな大興奮してた。
「ロシアのT―34を撃破できるなんて……！　これはすごいことですよ！」
ゆかりんたら、まだ感動を噛み締めてる。だけどその後ろで、みぽりんがなんか、不安そうな顔になってた。

ん？
「？　みぽりん、どうしたの？」
「……あ。その、うん。うまくいきすぎるかな、って」
「え？」
「だってこんな簡単に、あのプラウダ校が撃破されるはずが……あっ！」
『残った一輌、逃げていきますよ！　どうするんですか、隊長～？』
みぽりんが気付くのと、そんな通信が入るのとが同時だった。
そっか、敵は三台いたんだっけ。
「全車輌、前進。追撃します！」
すぐにみぽりんが判断して、私たち大洗女子の戦車が追いかける。
おおっ、イケイケムードだよ～。
恋愛と同じだよね！　いけると思ったときにいかないと、ダメになっちゃうもん。
でも男ってなぜか、追いかけると逃げるのよねー。今の敵みたいにさ。
だけど、敵は闇雲に逃げてたわけじゃなかったみたい。
だってしばらく追っていくと……わ、わ！　増えた⁉
『こちらウサギ！　あそこに固まってます！』
M3に乗る一年生から報告が来た。そして、こっちで一番背の高い戦車だからか、真っ先にあるものを見つけた。
『あ！　フラッグ車発見しました！』

おおお？
確かに、逃げてた敵戦車の方向に、数台の戦車が集まってた。その中に三角の赤い旗が、白い世界に映えていた。
『千載一遇のチャンス！　よし、突撃‼』
ついみぽりんにかわって命令しちゃったのは、カメさんチームの河嶋先輩だった。
それをきっかけに、『行けー！』『アターック！』なんて、みんなが攻撃を始める。
もちろん敵も反撃に出た。ばんばん撃ってくるけれど、でも。
『プラウダT－34、撃破！　白旗確認！』
審判の声で、敵をさらに一台やっつけたのがわかる。
うわ！　や、やったじゃん！
だけどみぽりんが、「ちょ、ちょっと待って……！」ってなぜか慌てた。
へ？
でもそんな呼びかけは、他の通信で掻き消されちゃう。
『フラッグ車さえ倒せば、勝てる！』
『ブリッツクリーク‼』
『こうなったらストレート勝ちしてやる！』
『待ちなさいよー！』
そして後退を始めた敵を追って、味方の戦車はどんどん前へと進んでいく。
敵は、なんか雪に覆われた、寂れた町の中へと入ってくよ。あ、建物を使って隠れる

気？　逃げられちゃう！
私はつい、手に汗を握った。
でもみぽりんは一人、また戦車の外に身を乗り出す。
だから、周りを見てた彼女だけが、「予兆(よちょう)」を察して――。

「!?　東に移動してください！　急いで！」
突然みぽりんが、慌てて叫ぶ。
なに？
即座に操縦手(そうじゅう)の麻子(まこ)が反応し、側に貼り付けたコンパスを見て、Ⅳ号戦車の方向を変えた。
だけど他のみんなは、『へ？』『なんだ？』とか無線の向こうでぽかんとしてた。
私も、さっぱり意味がわからなかったけれど。
「ダメっ、東側にも敵が！　手薄なのは……南南西です！　全車輌(しゃりょう)、方向転換を！」
え、ええ――っ？
再び急旋回したⅣ号の中で、私はようやく異変に気付く。
雪の中、あっちこっちに敵の影が！
嘘(うそ)っ、これって……。
「全方位、囲まれてる……！」
外に頭を出して見回したみぽりんが、うわずった声を漏らした。

そ、そんな――。
「周り全部敵ってこと？　じゃあ、私たちは追いかけてたんじゃなくて！」
「罠（わな）だった、ってことですかあ？　に、西住（にしずみ）殿ー!?」
私とゆかりんが理解した。
無線の向こう側でもみんな、息を呑（の）む様子が聞こえる。
でも、もうすでに遅かった。
周囲から、砲撃の音が連続して響いてくる！
「きゃあああ――――！」
Ⅳ号ががくがく揺れて、私は悲鳴を上げちゃった。
「ね、狙い撃ちされてます！　いえ、こっちだけじゃなくて……」
『わあー！　さ、Ⅲ突も狙われてるっ!?　くそ、こっちの砲塔（ほうとう）が回らないからってー！』
Ⅲ突？　じゃあ、歴女（れきじょ）さんたちのいる、カバさんチームだ。
「長砲身の二輌（りょう）を集中的に？　まずい！」
みぽりんが青ざめてた。
もちろん他の戦車だって、攻撃を受ける。
『あああああ！　し、主砲身、吹っ飛びました～！』
主砲身、ってそんな言い方をするのはたぶん、砲身が二つあるM3リーのウサギさんチーム？
って、ピンチなのは私たちもだよ！

「砲塔が動きません！」
応戦しようとしてた華（はな）が、報告した。
うわ、それって……やばいじゃんー！
というか麻子（まこ）がんばってⅣ号を走らせてくれてるけど、このままだと——やられちゃう!?
「全車、南西の大きな建物に移動してください！」
だから混乱の中、みぽりんがみんなに命じた。
南西？　ええと、もしかして、あそこ？
私は窓の向こうに、それらしき大きな建物を見つける。
あれって、廃墟（はいきょ）になった教会、なのかな。ドアが外れてた入り口から、確かに戦車がそのまま入れそうで。
「あそこに立てこもります！　急いでっ！」
うん！　もちろんみんなも応じるよ。
混乱しながらも『わ、わかりました！』『隠れろー！』『戦略的転進！』って通信に返して、他の戦車が教会に向かう。
だけどその間も当然、敵（てき）の攻撃は続いてて——。
えええ？　Ⅳ号が最後に、教会内に逃げ込もうとした直前、その正面でⅢ突が動かなくなる。
ううん、砲撃を受けて履帯（りたい）が吹き飛んじゃったんだ！

え、どーすんの？

Ⅲ突も危ないけど……このままだとそのⅢ突が邪魔で、Ⅳ号が入れないよ？

……って思ったとき、みぽりんは冷静に指示を出してた。

「冷泉さん、Ⅲ突をバックで押して‼」

「やってみよう」

みぽりんの無茶に、麻子ったら即答する。

ぎゅばっ！　って雪を蹴散らして、Ⅳ号はくるりと半回転してみせた。わわわっ、真横にある通信機に押し付けられる～！

なんてのも、束の間。今度はバックで加速した。

それはやがて、急制動がかかるみたいに、硬いなにかと衝突する。

わわわわっ⁉　Ⅳ号内で私たちは前後に揺さぶられたけど……あ、これって。麻子ったら指示通り、Ⅲ突にくっつけたの？

そのままごりごりと強引に、Ⅳ号が後退して――。

ばんばん撃たれる中、たぶん私たちのⅣ号が、Ⅲ突を押しながら教会へと入った。

教会の建物は、けっこう頑丈にできてるみたい？

雨のように砲弾が降り注いで、コンクリート製の壁や天井が揺れるけど、ぎりぎりどーにか持ちこたえてる。

でも、撃たれるたびに瓦礫とか埃とか、いっぱい落ちてくるよ！

これって、やっぱり一時しのぎ？

無事な38tががんばって、入り口から外に向かって応戦するけど……。
「ど、どうします？」
ゆかりんが不安げに、みぽりんに訊いた。
そのみぽりんは外に顔を出し、味方のダメージを見てから、渋い表情で戻ってくる。それが、すべてを物語ってた。
もう、ダメなの？
だって……負けちゃいけないのに⁉
——そう、私があの忘れたい「廃校」の件で、思わず胸を押さえたとき。
あれ？　音が……？
「っ！　砲撃が、やんだ？」
みぽりんが耳を澄ませた。うん、確かに。さっきまでのやかましさが嘘みたいに、教会の中には戦車のエンジン音だけが響いてる。
これって、いったいどういうこと？

4 ――ついに言っちゃった。

「こちら、プラウダ校の特使です！　大洗女子のみなさん、今からそちらに向かいます！」
わけがわからず、様子を見るために私たちは、戦車の外に顔を出したよ。
そこに聞こえてきたのは、遠くからかけられた、そんな声だった。
応戦をやめた38tの向こう側。教会の入り口に向かって近づいてくるのは……白い旗？
それは敵戦車の、敗北を示すものじゃない。
持ってたのはだって、人だったから。
プラウダ校のジャケットを着た女の子が二人、こっちにやってきてたのだ。
えーと、特使、って言ったよね？
「カチューシャ隊長のメッセージを持ってまいりました！」
「全員、土下座すれば許してやる、だそうです」
二人が淡々と、ぼろぼろの戦車に乗った私たちに告げた。
は？　いきなりすぎて、もちろん誰も反応できない。
河嶋先輩がなんか、「NUTS！」って叫んだ。なっつ……なに？　落花生は確かに、うちの茨城でもつくってるけど？

ううん、それより――上下座あ？

「隊長は心が広いので、三時間は待ってやる……とおっしゃってます。では」

そして呆然(ぼうぜん)としてる私たちの前から、特使として来た二人は回れ右して、帰っていった。

許すって、えーと。

ど、どういうこと？

「敗北を認めれば、これ以上の攻撃はしない。つまり、そういう……」

戦車のエンジン音だけが響く中、みぽりんがⅣ号から飛び降りた。手には双眼鏡を持って、教会の入り口から外を見る。

「敵(てき)は遠巻きに下がったけど、こっちを取り囲んだまま。三輌(りょう)は倒したけど、それでも向こうは十二輌も残ってて」

「誰が上下座なんかっ！」

そのとき、吐き捨てるように言ったのは、バレー部のリーダー磯辺(いそべ)さんだった。

八九式に乗る部員の中で、一番背が低いけど、いつもみんなを引っ張ってく熱血なコだよ。

だから、なのかな。

誰よりも、ものすごく憤慨(ふんがい)してた。

「ああ、そのとおりだ！」

頷(うなず)くのは38ｔから身を乗り出した、河嶋先輩。

「カチューシャめ。全員、私たちより視線を高くしたいんだな」
「徹底抗戦だ！」
歴女のエルヴィンさんが言った。
「戦い抜きましょう！」
一年生からも、そんな声が上がる。
当然だよ！　みんなが怒って、騒然となった。
だけど、隊長のみぽりんは――。
「でも、こんなに囲まれていては……一斉に攻撃されたら、怪我人が出るかも。この建物だって、そうは持たないだろうし」
みぽりんたら入り口から戻ってきて、教会内にある六台の戦車を見回した。
あ……。私も同じように見て、はっとする。
だって、かなりひどい有様だったから。Ⅳ号は砲塔の側面が歪んでたし、Ⅲ突は履帯と転輪が外れてた。
M３も二つあるうちの砲身が一つ、なくなってる。
みぽりんの懸念は、当然かも。
それを察したのは私だけじゃなくて。
「……わたくしは、みほさんの指示に従います」
Ⅳ号から降りて、華が言った。
いつものようにやわらかく、そっと微笑む。

「だって。みほさんが、わたくしたちの車長ですもの。従うのがチーム、ですよね？」
「！　五十鈴さん……」
「わ、ワタシもです！　西住殿っ！」
ぴょこんっ、とⅣ号の上で挙手したのはゆかりんだよ。
「西住殿がそう判断されるのなら……正しいことだと思いますので！」
「準決勝まで来ただけでも上出来だ。無理はするな」
操縦席から顔だけ出した麻子も、冷静に言った。
それがきっかけで、他のチームのみんなも、しんと静まり返っちゃう。
頭に登ってた血が一気に、クールダウンしたみたい。
それぞれ戦車から出てきて、私みたくダメージの大きさを見て、嫌でも現実を知らされたから？
けど、私は……。いつもなら「上下座くらいしたっていいよ」なんて、真っ先に共感してるんだけれど。
ダメ。できないよ。
だって、だって！
こんなところで言えないけど、私たちは負けちゃったら、もうっ。
——そんな私の葛藤を感じ取ってか、麻子がふいに「沙織？」なんて声をかけてきた。
うひっ！　思わずびくっとなっちゃった。
でも、私が誤魔化すより先に。

「ダメだ!!」
鋭く、河嶋先輩が叫んでた。
「ダメだダメだダメだっ、絶対に、負けるわけにはいかん！　いかないんだ！」
それはものすごく真に迫っていて——他のみんなは目を丸くする。
「桃ちゃん？」
そう横で小山先輩が呼びかけても、河嶋先輩の勢いは止まらない。
「勝つんだ、絶対に勝つんだ！　勝たないとダメなんだッ!!」
「ど、どうしてそんなに……」
なにも知らないみぽりんが、きょとんとする。
「冷泉さんも言ってましたけど、初めて出場して、ここまで来ただけでもすごいと思います。戦車道は戦争じゃありません。勝ち負けよりも大事なものがあるはずです」
「勝つ以外のなにが大事なんだ！」
河嶋先輩が反論した。
でもみぽりんは、静かに首を横に振る。
「わたし……この学校へ来て、みんなと出会って。初めて、戦車道の楽しさを知りました。この学校も戦車道も大好きになりました」
ゆっくりと、私たちと戦車を見ながら、みぽりんが語る。
それはこの大洗女子チームを通して、彼女が学んだ大切なこと。
「だから、その気持ちを大事にしたまま、この大会を終わりたいんです！」

みんなを、かけがえのない仲間を傷付けたくないから。それはみぽりんの優しさだった。

だけど、それが今の私には突き刺さる。



もちろん、河嶋先輩にだって。

「なにを言っている……？」

ふらり、と河嶋先輩がよろめきながら、泣きそうな顔をした。

言葉を喉に詰まらせる。

だから。

「もーいいか、河嶋ー。ちゃんと言わなきゃね、西住ちゃんや……みんなにも」

後ろにいた会長の角谷先輩が、ぽんと河嶋先輩の背中を支えてねぎらった。

……えっ？

ま、まさか。

「あのね。試合に負けたら、それでうちの学校は、なくなっちゃうの。だから、負けらんないんだー」

嘘みたいにさらりと、会長さんは言ってのけた。

もちろんみんな、「は？」って固まる。

あ、あ、当たり前だよ！

「……。学校が、なくなる……？」

ようやく口を開いたのは、みぽりんだった。

角谷先輩はずっと、干しイモも囓らずに真面目な顔をしてた。隣では小山先輩が、申し訳なさそうにしてる。

それがなによりも「真実」だって物語っていて、ここにいた誰一人、言葉を失って動けなかった。

って、最悪のタイミングだよ、これー！

恋愛でもこんなシチュエーションで告白したら、絶対失敗するんだから！

「河嶋の言うとおり。この全国大会で優勝しなければ、我が校は廃校になる」

改めてもう一度、私たちに角谷先輩が伝えた。

「突然、学園艦教育局ってとこに呼ばれてね～。行ってみたらいきなり、『学園艦は維持費や運営費もかかるから、全体数を見直す』って。それで成果のないうちみたいなとこが、統廃合されるんだってさ。それも来年度には」

……嘘みたいな話、だよね？

角谷先輩の声だけが、戦車と私たちだけがいる廃墟の中に、静かに染みた。

「でも、なにか実績ができれば、避けられるかもしんない。たとえば……昔盛んだった戦車道を復活させて、優勝でもしちゃえば、ね」

「それで、戦車道を復活させたんですか……」

みぽりんがそう言うと、やがて他のみんなもぽつぽつと、「だから、いきなり？」「生徒会がプッシュして、人集めしてたんだ」「履修の特典がすごいのも、そのせい？」なんて話し始める。

「実際、都合よかったのよねー。戦車道やれば、連盟から助成金も出るって聞いてたし。

それを学園運営費にも回せるしさ～」
さらに会長さんが付け足した。
あ、なるほど……。いろいろ考えた末に、決めたんだ。
でも。
「い、いきなり優勝なんて無理ですよ！」
熱血なバレー部キャプテンの磯辺さんが、反論した。
え、って私は思っちゃう。
だって磯辺さんの口から、そんな弱気な言葉が出るなんて？
ううん。バレー部再建を目指して、三人の仲間たちとがむしゃらにがんばってる彼女だからこそ、なのかもしれない。
「自分たちは根性で、ここまできました！　でも、他の学校だってきっと、同じくらいかそれ以上の努力はしてる！　だからこそ優勝は尊く、簡単に手が届くものじゃないんです！」
「うん、わかってるよー。ここまででも、よくやってきたって思ってる」
だけど角谷先輩は、反論しない。
ほら、ってかわりに、ここに逃げ込んだ六台の戦車たちを指し示した。
「アテは外れるもんでさ。昔盛んだったなら、もっといい戦車があると思ってたんだけど……予算がなくて、いいのはみんな売っちゃったらしいんだよねー」
「なっ、なんですか⁉　では、ここにあるのは！」

ゆかりんが激しく動揺した。

「もしかして、売れ残りだったんですかー！」

「うん、そう。みんなね」

「……そ、そんな。あああああ、鋲がたまらなく愛くるしい八九式も、三段砲塔のかっこいいM3リーまで⁉」

「それでは優勝など、到底不可能では」

頭を抱えたゆかりんの横で、コートにマントを重ね着したカエサルさんがぼやいた。

「そんなこと、わかってる！」

会長さんに支えられてた河嶋先輩が、絞り出すように言ったよ。

「だが、他に考えつかなかったんだ！　占いだけで、なんの特徴もない学校が生き残るには……」

「無謀だったかもしれないけどさ～。あと一年、泣いて学校生活を送るより、希望を持ちたかったんだよ」

角谷先輩は――相変わらず、背筋を伸ばしたまま話す。

そこに後悔なんて文字は、微塵もなかった。

かわりに小山先輩が、ポニーテールの頭を下げる。

「みんな、黙っていてごめんなさい」

――再び、しんとした静けさが訪れる。

誰も、信じたくないんだ。

嘘（うそ）、って言って欲しいんだ。
あのみぽりんでさえ救いを求めるかのように、華（はな）や麻子（まこ）、ゆかりんを見る。そして、私も。
だけど……私だって、生徒会とは同罪だから。
「ごめん、みぽりん。会長さんたちの言ったこと、全部ほんとなの。……私、実は聞かされてた」
私は覚悟して、自白した。
きっと男子に告白するよりも、もっと息を詰まらせながら。
「武部（たけべ）、さん？」
「私が頼まれてたの。頃合いを見計らって、隊長のみぽりんには、話すようにって」
「……」
その言葉を受け止（と）めたのは、押し黙ったみぽりんだけじゃない。
一年生の六人が、真っ先にぼろぼろ泣き出して、互いに肩を寄せ合った。
「バレー部復活どころか、学校がなくなるなんて……」
磯辺（いそべ）さんを筆頭に、バレー部たちが肩を落とす。
その隣では、歴女（れきじょ）の四人が呆（あき）れたり、うなだれたりしてた。
「そんな！　なんのためにわたし、参加したのよー！」
風紀委員のソド子さんが、おかっぱ頭を振り乱して怒る。

そして、私たちあんこうチームのみんなだって。
「この学校がなくなったら、わたくしたち、バラバラになるんでしょうか……」
不安を口にしたのは、華だった。えっ、そんな！
でも、そっか。
……当然、そういう可能性だって――。
「そんなのやだよ」
私がどうにか言えたのは、それだけだった。
ええっ⁉ と、さっきまで「Ⅲ突もカワイイのに。ワタシのⅣ号だって長砲身になってより愛しく」なんてぶつぶつ言ってたゆかりりんも、我に返る。
「い、嫌です！ だって……みなさん、初めてできた友達なのにー！」
あわあわとゆかりりんたら、私や華、麻子とかのコートの袖を引っ張る。
一方、一人冷静なのは麻子だった。
「単位修得は、夢のまた夢、か」
いや、そーゆー状況⁉
――だけど。
「まだ、試合は終わってません」
ふいにそう言ったのは、みぽりんだった。
ちらりと腕時計を見て、時間を気にする。
「考える時間は、あと二時間と五十分ほど。まだ負けたわけじゃありません」

「西住ちゃん？」
会長さんもびっくりする。う、うん、だよね？
でも、みぽりんは強かった。
「がんばるしかないです。だって、来年もこの学校で戦車道をやりたいから。みんなと……」
あ。
それは——きっと、みんなそう。
私はみぽりんを見つめた。ううん、華も麻子も、ゆかりんも。
生徒会の三役も一年生も、歴女さんたちもバレー部の四人も、風紀委員の三人だって。
——いつしか全員が、落ち込んでいた顔を上げて、真っ直ぐみぽりんを見てた。
「わ、ワタシも西住殿と同じ気持ちです！」
みんなの気持ちを、ゆかりんが代弁した。
……だね！
「そうだよ、とことんやろうよ！」
私もそこに加わった。
「諦めたら終わりじゃん、戦車も恋も！」
「まだ戦えます！」
相変わらず素手だった右手をぐーぱー動かして、華が熱意を露わにする。
その側で麻子は、「ん」って静かに頷いた。

「そーよ！　風紀委員はね、だいたい学校を守るためにいるんだからー！」
そこにソド子さんまで参加する。おおお？
みぽりんたら、それを見て小さく笑顔になった。
「……降伏はしません！」
やがてきっぱりと、言い切っちゃう。
それは生徒会の三人に向けた宣言だよ。
「最後まで戦い抜きます、ただし、みんながケガをしないよう、冷静に判断しながら」
「うん」
わかった、と会長さんが了承する。
もう、誰も諦めない。
「では、壊れた戦車の修理をします！　Ⅲ突は足回り、M3は主砲、Ⅳ号は砲塔を。あと、寒さでエンジンのかかりが悪くなってる車輛は、エンジンルームを暖めてください。時間はありませんが、落ち着いて！」
みぽりんがさっそくてきぱき指示を出した。
もちろん私たちは、「はい！」って返事するよ。すぐにそれぞれ、動き出した。
気落ちしてた河嶋先輩も、片眼鏡を、度外して、目元をごしごし拭い去る。
「西住！　我々は作戦会議だっ！」
そしてみぽりんを、いつものように威勢良く呼び付けた。

「偵察を出しましょう。包囲網の手薄なところがわかれば、それで」
作戦会議では、みぽりんがそう提案したみたい。
結果、私たちの中から何人かが選ばれる。
二人組を、二つだよ。
まずは「戦車の知識がある」ってので、ゆかりんとエルヴィンさんが。それと「視力がいい」ってので、なんとソド子さんと麻子が任命されちゃった！
麻子はゆかりんからざっと、敵戦車の特徴を聞いて、覚えたみたい。う、さすがは学年主席だよ。すごい。
一緒に組まされたソド子さんは、「なんでわたしが、あなたとなのよ！」なんて、不機嫌だったけれど。
「行くぞ、グデーリアン！　こんなときは……わかっているな？」
「はい！　『雪の進軍』ですね！」
……エルヴィンさんとゆかりんときたら、なんか仲良く歌いながら、雪に紛れて出て行ったけどさ。
偵察の二組が戻ってくるまで、もちろん私たち残った面子は、戦車の応急修理に追われてた。
Ⅲ突は、どーにかなりそう。戦力の要の戦車でもあるから、みんなで集中して取りか

かってるし。
大砲が一つ吹っ飛んだM3は、さすがに無理みたい。副砲は残ってるから、戦えそうなのが幸いだよ。
でも、Ⅳ号の方は……。
「無理ですね」
私と一緒にへこんだ装甲を見てた華（はな）が、溜息（ためいき）を吐（つ）いた。
うー、だよねぇ。
側面に、斜めに砲弾を受けて、思い切り鉄板が歪（ゆが）んでた。そのせいで、砲塔（ほうとう）が回らなくなっちゃったんだ。
戦車の中に入って、カーボンでコーティングされた内側から、トンカチで叩（たた）いてみても……びくともしない。女子の力じゃ、限界があるよう。
だから結局、私たちはⅢ突の修理を手伝ったくらいで、やることが終わった。
時間は、まだ一時間くらい残ってるかな？
間に合ったのはよかったのか、それともこれ以上なにもできない、ってだけなのか……。
――マイナス思考はしたくなくて、私はゆかりんから渡されてた、彼女のリュックを取り出した。
中から見つけるのは、「自由に使ってください！」って言われてた、携帯ガスコンロだよ。ほんとゆかりんって、準備いいんだから。

それで火を熾すと、自然とみんなが集まってくる。
「あったかーい」
「助かる〜」
いつしかみんなで輪になってた。
それもそのはず、教会の外ではいつの間にか、吹雪になってたもんね。
雪が叩き付けるように降っていて、気温もけっこう下がってるっぽい。
うー、寒い〜〜〜〜〜。
「戦車が冷えるので、素手で触らないようにしてください」
みぽりんがそう念を押す。
私はリュックの中からさらに、缶スープを見つけたよ。
「偵察に出たゆかりんや麻子たち、大丈夫かな……」
つい、あの二組のことを心配する。
だからリュックにあった小型のお鍋とかも出して、集めた雪を溶かして、コンロでスープを温め始めた。
四人で分けたらそんなに量はないけれど、せめて帰ってきたらすぐ、暖を取れるようにって。
「……こんなに天気が荒れるだなんて」
みぽりんはずっと、二組が出ていった、建物の割れた窓の側に立ってた。
あそこはかなり冷えるはずだけど、動かない。

だけど、きっと偵察組の四人は、もっと寒い思いをしてるから――。
なんて考えてた、そのとき。
「ただいま帰還しました！」
入り口の方から小走りで、雪にまみれて戻ってきたのはゆかりんと、エルヴィンさん！
それに少し遅れて、破れた窓から麻子とソド子さんも帰ってくる。
わ、わっ！
「お帰りなさい！　大丈夫？」
みぽりんが手を貸して、窓枠を越えようとした麻子たちを手伝うよ。
もちろん私も大急ぎで、あったまったばかりのスープをカップに注ぐ。
「こちらへ！　火にあたってください！」
華が戦車に積んでた毛布を持って、走った。
さっそく麻子にゆかりん、エルヴィンさんにソド子さんが、毛布とスープにありついたよ。
そしてガスコンロの前で、広げた地図に、調べてきた情報を書き込んでいく。
うわ、なんか、かなり細かーい？
「あの雪の中で、こんな詳細に……！」
だってみぽりんが、そう感激するほどだもん。すごいじゃん！
えへへ、とゆかりんが照れた。
「雪の進軍はけっこう楽しかったですよ」

「うむ、楽しかった！」
エルヴィンさんが笑ってた。
でもソド子さんの方は、なんだかへとへと？
「こっちは大変だったわよ……」
「敵に見つかったからな」
さらりと麻子が、暴露する。
えっ？
「しかし、それがかえってよかったようだ。あれはソド子のうっかりだったが」
「！　なに言ってるの、見つかったのも作戦よ！　あと、わたしがソド子だったら、あなたは略してレマ子なんだからね！」
「はいはい」
……たぶんそーやって騒いでて、見つかったんだろうな～。
結果オーライだけどね！
「これで作戦が立てやすくなりました。ありがとうございました！」
みぽりんが地図を手に、偵察組に感謝した。
うん、よかったよかった。
けど……あれ？
なんだろう。みぽりんの表情は、なんだか固いままだった。
彼女は地図から目を離し、吹雪く外の様子を見てた。

「あとは、この天候次第かも……」

＋＋

その呟きの意味がわかったのは、しばらくして――審判からの緊急連絡が来てからだった。

「おい！　悪天候のせいで、競技を続行するかどうか協議中って無線が入ったぞ！」

持ち回りで、各戦車の無線機に張り付いてた私たち。38tの順番になって、河嶋先輩が血相を変えて走ってきた。

はい？

それって、まさか……。

「やっぱり」

みぽりんが唇を噛んだ。

え、どうなるの？

「……。ルールブックだと確か、試合中止の場合は審判の判定で勝ち負けが決まる、だったな」

ルールを全部暗記してる麻子が、スープを飲み干し、ぽつりと言った。

「！　そうです、そんな試合を、テレビで見たことありました！」

ゆかりんが毛布を落として、みぽりんを見る。

「両チームの損耗率や戦況を分析して、数人の審判が公平にジャッジしていくんです！」
「損耗率ってことは……わたくしたちは相手を、三輛やっつけましたから」
ええと、って華が計算しようとする。でも、「いえ」とゆかりんが首を振った。
「確かにうちはプラウダを三輛も仕留めました。でも、残ってるのは圧倒的に向こうです。それに今の戦況は、もちろんこっちに不利ですから……」
「判定負け、ってこともあるよ」
最後はみぽりんが言った。
え、えええええ？
「それって、戦わずにこのまま負けが決まっちゃう、ってこと⁉」
私は思わず確認した。
こく、とみぽりんが小さいけれど、はっきり頷く。
そ、んな……！
それを聞いてた他のみんなも、愕然とした。
忘れてた静けさが、またやってくる。
でも、今度のは──「絶望」だった。
なんにも、できないの？
せっかく、修理だってどうにかできたのに？
ただ無情に、教会の外では真っ白な雪が暴れていて──。
「スターリングラードを思い出す……」

「縁起(えんぎ)でもないぜよ」
「じゃあ冬の八甲田山とか」
「それはもっと縁起でもない」
歴女(れきじょ)さんたちが力なく、そうぼやくのが精一杯だった。
「天は我々を見放したっ」
カエサルさんのその言葉が、今のすべてを表してた。
だけど。
「みんな、どうしたの？」
みぽりんだけが、まだ諦めてなかった。
「もうすぐ吹雪もやみます！　最後まで、やむと信じなきゃ！　元気出していきましょう！」
ね？　って精一杯、私たちを励ましてくれる。
だけど、私も「……うん」って小さく返すのが、限界だった。
ううん。限界を、越えちゃったんだ。「はーい……」とか「わかってまーす」とか、他にもぼそぼそした声だけが上がる。
みんな、同じ状態だった。みぽりんがさすがにたじろぐ。
でも……もう一人だけ。
ぱしん！　って自分の頬(ほお)を張って、しゃんとする人がいた。
それは河嶋(かわしま)先輩だ。

「しっかりしろ！　みんなで決めたことだろう？　降伏しないで、諦めずに戦うって！」
けれどなぜかその矛先が、他に行っちゃう。河嶋先輩は片眼鏡越しに、ぎろりとみぽりん一人を睨んだよ。
「おい、もっと士気を高めないと！」
「え」
「このままじゃ戦えんだろう」
「は、はい……」
「なんとかしろ、隊長だろっ」
「え、ええっと〰〰〰」
迫られたみぽりんが、すごく困った顔になる。
あ、テンパったときの目だ。
助けないと。私は思わず気力を振り絞り、みぽりんのもとへ寄ろうとした。
けど、足がうまく動かない。
なんで？　私……こんなに弱かった？
——だからみぽりんが、一人でがんばった。
困惑しながらも、みんなの前で回れ右する。
ぴんと背筋を伸ばし、深呼吸してから。
「アアアン、アン。アアアン、アン。あんこう食うなら大洗！」
いきなり始めたのは、なんとあんこう踊りだよ！　もちろんあの「思い出したくもな

い」振り付けで！

ええええ⁉

「みぽりん……？」

もちろん私はあっけにとられる。

ううん、周りにいるみんなだって。

「ど、どうしたんですか⁉」

ゆかりんなんか面食らいすぎて、わしゃわしゃ自分の癖毛を掻き回した。夢でも見てるのか、って感じ？

ううん、みぽりんは至って真面目に踊ってた。

「ほら、みんなも歌ってください！　わたしが踊りますから！」

って告げて、そのまま真剣に歌い、踊り続ける。

「逆効果だぞ、おい！」

この場にそぐわない間の抜けた歌詞に、河嶋先輩が呆然としてた。

……そんなこと、ないよ！

私はいつしか、足に力が入ってた。

だって、だって！



「あの、恥ずかしがり屋のみほさんが……」
同じ気持ちで、華が瞳を潤ませてた。
――だね！
「そうか、みんなを盛り上げようとしてるんですね、西住殿は！」
ようやくみぽりんの真意に気付いて、ゆかりんが立ち直る。
「微妙に踊り、間違ってるけどな」
麻子が手厳しく、そんなことを言った。
もう、一言多いんだから さ〜。
だけど、麻子はかすかに笑ってた。
そーだよ、踊りが多少下手だって、みぽりんの気持ちは十分伝わったんだから――！
「ワタシも踊ります！　アアアンアン！」
そして真っ先にゆかりんが、みぽりんの横に並んで踊り出した。
「やりましょう！」
そのときには華も動く。
麻子だって、「仕方ないな」ってそこに続くよ。
もっちろん、私もね！
恋と同じく、やるときはやるよー！
ついでに他のみんなを見回して、目で合図する。

うん、きっかけはそれで十分。へたり込んだりしてた二年生や、立ち尽くしてたバレー部さんに歴女さんたちも、動き出す。
「みんな、みぽりんと一緒に、行くよー！」
せーのっ！　私は精一杯の声を張って、みぽりんの側に飛び込んだ。
ああ、もう、みんなヤケだね！
でも一度は一緒に踊った仲だもん、すぐに息を合わせてぬるぬる踊る。あんこうの「ぬめり感」が、この振り付けのキモなのよね……って、あああ、体がしっかり覚えちゃってる!?
忘れたい記憶だけどさ、でも——私たち戦車道チームが初めてまとまったのも、あんこう踊りを通して、だったよね。
そして今回は、ソド子さんたち風紀委員の三人も参加してた。あはは！
ひとしきり踊って、一息吐いた頃には、私たちは全員笑顔になってたよ。ほんと私たち、なにやってんだか！
でもさ。
「なんか、元気になれました！　西住殿！」
ゆかりんが笑ってみぽりんにお礼を言った。
うん。それはたぶん私たち、みんな同じ気持ちだよ。
——ほんとに、不思議。
さっきまでずっとのしかかってた重しが、すっきり消えちゃったみたいだもん。

「よかった」
みぽりんが今になって、真っ赤に照れて、安堵(あんど)した。
私たちは誰もが、晴れやかな気持ちだった。
そして、それが天にも通じたの――?
「!　あっ、みぽりん、外!　外見て!」
ふと入り口から外に目をやって、私が最初に気が付いた。
あれだけ吹雪(ふぶ)いてたのに、いつしか風も雪も収まってた。
こ、これなら……いけそう!?

5　私も、努力しないとねっ。

だからきっかり三時間経ったって、プラウダ高校の特使が再びやってきたとき。

「降伏はしません。最後まで戦います！」

って、みぽりんがはっきりと追い返したよ。

たぶん、向こうにはすごく意外な返答だったみたい。慌てて白旗を持って、特使の二人が引き返してく。

そのときには、私たち全員はもう、自分たちの戦車に乗り込んでた。最後にみぽりんが、Ⅳ号の車長席へ戻ってくる。

——作戦はもう、決まってた。

全車、エンジンは始動してるし、いつでもいける。今更確認することもない。

あとは隊長のみぽりんが合図すれば、一気に戦車を動かすだけ。

でもみぽりんは車外に頭を出して、「本当にいいんですか？」って声をかけた。

喉のマイク越しに伝えたのは、たぶんこの作戦の要になる、カメさんチームの38tかな？

ちょうど私の通信手席の窓から、一番前に出てた38tの姿と、その上で振り返った会長さんの顔が見えた。

……。みぽりんが心配するのも、無理ないよね。

だって生徒会の三人が乗る38tには、作戦上、かなり無茶（むちゃ）をさせちゃうから。
それでいて——その役目を買って出たのは、会長さん本人だった。
『大丈夫だ、任せろ』
私の装着したヘッドホンに、無線で河嶋（かわしま）先輩の声が入る。
それはもちろん、隊長のみぽりんに向けたものだよ。
『これは、みんなを巻き込んだ我々のけじめなのだ、と会長がな』
「そーそー。気にしないでいーよ、西住（にしずみ）ちゃん！」
今度は38tから、会長さんの肉声が届いた。
会長の角谷（かどたに）先輩は、みぽりんに向かって手を振ってた。
「私らをここまで連れてきてくれて、ありがとね！」
それだけ告げると照れたみたいに、会長さんが戦車内に引っ込んだ。
みぽりんもやがて、Ⅳ号内に戻ってくる。
でも、「まだです」って咽喉（いんこう）マイクに呟（つぶや）いた。
「お礼を言うのは早すぎます。だってわたしたちにはまだ、次の決勝戦だってあるんですからっ」
うん。そのとーりだよ！
私も、華（はな）もゆかりんも、麻子（まこ）までもがⅣ号の中で頷（うなず）き合った。
だから。

「……それではこれから、敵包囲網を一気に突破する『ところてん作戦』を開始します！」
みぽりんがついに、全チームに命じた。
「パンツァー・フォー‼」
『行くぞッ！　我らに、続け――！』
真っ先に受信機から、38tの河嶋先輩の呼びかけが聞こえる。
雪を踏みしめ、私たち大洗女子の戦車は一列になって、ついに教会から出た。先頭を行くのは作戦通り、38tだよ。
だから同時に始まった、プラウダ校の一斉砲撃を受けるのも、当然38tだった。
きゃあああ！　二番手のⅣ号も、けっこう攻撃されてるよ⁉
だけど構わず、私たちはどんどん動く。
先頭を走る38tを盾にして、フラッグ車の八九式を真ん中に守り、突き進むしかないんだから！
そして狙うのは、偵察組が入手した情報をもとにした、包囲の最も手薄なところ。……じゃなくて。
みぽりんの、「たぶんわざと手薄な箇所をつくって、誘ってるから」って判断で――逆に、一番分厚いところに突っ込んじゃう！
もちろん、勝算あってのことだよ。
だってそこには当然、敵のフラッグ車もいるんだから。

って、やっぱり、すごい攻撃がきちゃうけど！
「38tが！」
みぽりんが言葉を詰まらせる。
前を走る38tは、一番攻撃を受けて、もうぼろぼろになってた。
だけど、その走りは止（と）まらない。
むしろ……反撃して、当てた？
「わ！　す、すごいよ、カメさん！　河嶋（かわしま）先輩！　ずっと外してたのに、今、二台やっつけちゃったよ⁉」
私は思わず受信機に叫んでた。審判から『プラウダ、76と85に白旗！』ってジャッジも入る。
『当たり前だ！　今のは交代した、会長が撃ったのだからな――っ！　すごいだろう、会長は！　はっはっは！』
で、河嶋先輩からはそんな報告が入って――って、撃ったの会長さんだったの？
あー、なるほど。それで当たったんだ！
いや、最初から砲手を角谷（かどたに）先輩がやってればよかったんじゃあ……。
――それはともかく。
「今です！　ところてん、準備してください！」
勢いに乗って、みぽりんが通信で呼びかけた。
ところてん作戦。

それはみぽりんが、さっきのあんこう踊りをヒントに思い付いた、「息を合わせる」攻撃法だった。
「一発目、いきまーす！　ア、アアン！」
『『アン！』』
通信で、あんこう踊りの音頭にのせて、みんなが声をそろえたよ。
同時に六台の戦車たちが、一斉に砲撃する。
走りながらの攻撃だけど、私たちは敵の一つに狙いを付けて集中砲火を浴びせるから、当たった！
でも、審判のジャッジより先に、次弾の装填に取りかかる。Ⅳ号ではゆかりんが、専用の手袋の手で砲弾を叩き込んだ。
続いて華が、砲塔の上下のみ調節する。
そう、Ⅳ号の砲塔は回らなくなってるから、それしかできないんだよね。
で、狙うは簡単。
先頭を走り、方向を決める38tの、その針路上にある敵戦車！
「もう一発！　ア、アアン！」
『『『アン！』』』
また当たった！
うー、私も忙しいよ。遅れて入ってくる審判からの報告を、せわしなくまとめて報告する。

「敵、T―34／76、KV―2攻撃不能だって！　これでだいぶ前方は片付いたんじゃない？」
ついでに狭い窓からも、前を見て目視で確認する。
だけど、そのとき……あぁっ！
私の見てる前で、38tの動きが止まった。
灰色の煙をくすぶらせながら、ついに白旗が上がっちゃう。
『これまでだな……あとは頼んだ、西住ー！』
そんな通信だけを残して、すれ違う38tの中から、河嶋先輩や小山先輩に会長さんが降りてくる。
たぶん「がんばって！」とかいろいろ声をかけたんだろう。
走る戦車内にまで、それは届かなかったけれど。
「……任せてください。会長たちの突撃を、無駄にはしません！」
みぽりんが決意を返した。
だから私たち残りの五台は、ただひたすらに前進を続ける。
その前にわらわらと、雪を蹴ってプラウダの戦車たちが集まってきた。
わわわっ、なにがなんでも突破させない気？
でも、それはみぽりんも見越してた。
「ところてん作戦『おかわり』に切り替えます！　……武部さん！」
私の名前を呼んでから、みぽりんたらそのまま、なんと車長席から外に頭を出しちゃっ

た。
危ないけど……危なくない！
私が、きちんと伝えればっ。
「二時方向が手薄になったな」
麻子が勝手に判断して、３８ｔがいなくなり、先頭を走るⅣ号の舵取りをした。
だけど今回は、もう撃つための作戦じゃない。
外に顔を出して、取り囲んでくる敵戦車の、砲塔の動きをみぽりんが見て――。
『！　黒点!!』
みぽりんが無線で合図したよ。それは他のチームに向けたもの。
そして、Ⅳ号通信手の私にも、当然聞こえた。
「今っ、急停止――！」
私はみぽりんの意図を、隣で操縦してる麻子に伝えた。
ぎゅごがっ！　てすごい音とともに、麻子がⅣ号を停止させる。
一瞬、車体がつんのめった直後、目の前の雪が弾けた。
敵の砲撃が、すぐ前に着弾したの！
でも急停止したからこそ、それは当たらない。だって相手は「そこに来るだろうな」って位置に、狙いを付けて撃ったんだから。
それは他の仲間の戦車も同じだよ。
みぽりんが、敵戦車の砲口が真っ直ぐこちらに向いたのを、「黒い点」って認識したと

き。いきなり止まれば着弾は、まずずれるんだって！
まさに、そのとーりじゃん！
だけど、当然私たちは止まるだけじゃ終わらない。
急停止の前に、それぞれの大砲が敵戦車に狙いを付けてる。砲塔が回らないⅣ号なんか、麻子が止まるついでに、きちんと鼻先を振っていて――。
『撃て――――‼』
みぽりんのかけ声とともに、残った五台の戦車が撃った。
結果は……ううん、かまってらんない。
戦車は命中率を上げるためには、止まって撃つのが一番だけど、同時に敵の的にもなるから。
すぐに麻子がⅣ号を発進させた。
『みなさん、あんこうチームに付いてきてください！　動きは、フェイント入って難易度高いですが、がんばって！』
「さて、多少きつめにいくぞ」
打ち合わせ通りのみぽりんのフォローと、麻子が本気を出すのは同時だった。
急発進したⅣ号は、また『黒点！』の合図で急停止。
華が撃って、続いて明後日の方向に走り出す。
えーと。要は、ジグザグ走行ってわけ。
中にいる私なんか、酔いそうになっちゃうけど、これが相手からは距離感狂っていいみ

たい。
敵の攻撃は、見事に一発も当たらないよ～。へへーんだ！
こっちは、当たってる！　撃破まではいってないみたいだけど、それでも敵の足並みが思い切り乱れてた。
そこを、みぽりんは見逃さない。
『全車輌、全速前進っ!!』
「麻子！　パンツァー・フォーだよ！」
その指示を私が伝え、麻子が一気にⅣ号戦車を走らせた。雪を蹴り、包囲網の破れた中を真っ直ぐに突っ切る！
もちろん後方には、仲間の戦車も一緒のはず。みぽりんが振り返って確認し、ようやく車内に戻ってきた。
「今です。フラッグ車、離脱して逃げてください！」
『……アヒルチーム、了解～！　マッチポイントにならないよう、引き離します！』
フラッグを付けたバレー部の八九式が、Ⅳ号より前に出たよ。
それは敵を誘う、罠の一つ。
だってこっちのフラッグ車が逃げるなら、必ず追いかけてくるよね？
『こちら最後尾の、カモよ！　しー、ごー……たぶん、六輌ほど追ってくるわ！　フラッグ車もいるみたい！』
そこにカモさんチームのソド子さんから、そんな通信が入った。

おおおお、フラッグ車まで？
「かかりましたね！　やっぱり、向こうはこっちを甘く見て、深追いしてます！」
ゆかりんが弾を込めながらも、嬉々としたよ。
うん、これは私たちの罠なの。
——ちょうど最初に、敵からやられたのと同じことを、うまくやり返したってわけ。
ううん、これだけだと決定打にはならない。
『きゃ————！』
って、なんか悲鳴が受信機に⁉
今のって……！
『う、ウサギチーム、走行不能～！　やられちゃいましたぁあああ』
一年生のコから、そんな報告が入った。審判の『大洗女子、M3リーに白旗！』って声も届く。
「み、みんな大丈夫ぅ⁉」
『大丈夫でーす！　あとはカモさん、アヒルさんをお願いします！』
思わず訊いた私に元気に応えてから、一年生はフラッグ車の護衛をカモさんチームに任せた。
『了解！　風紀委員の腕の見せ所……ああ——っ⁉』
「？　カモさん‼」
『……げ、撃破された！　なによ！　反則よ、校則違反よ！　なんであんな遠くから当た

るのっ？　うう、チームのみんな、健闘を祈るわ！』

やられたことをソド子さんが告げ、審判からもルノーB1の白旗確認が通信で来た。

「IS―2の122mm砲……！　やっぱり、強い！」

みぽりんが呻く。

なんか敵戦車の中に、すごい大砲積んでるのがあるんだって！

それが追いかけてくる中に、混ざってるの？　うわあ。

でも。

「あった！　前方に木立発見！」

みぽりんの声が、うって変わって弾んだ。

あ、確かに、雪ばかりの景色の向こうに――枯れ木の林が見えてきた。

そこは私たちが事前に目を付けていた、逆転のためのポイントだよ。

……あともう少し！

「あの木立に逃げ込みます！」

どかどか敵に撃たれながらも、私たち残った三台の戦車が予定通り、どうにか木立の中に分け入った。

木立の中だと、側面からは攻撃されにくいはず。

それがみぽりんの、第二のプランだった。

目論見通り、Ⅳ号とⅢ突で後ろを固めれば、敵の弾は八九式まで届かないみたい。

よーし！

でもⅣ号の砲塔は回らないし、Ⅲ突は最初から砲塔がなくて、前にしか撃てないから反撃はまともにできない。

『ええい、もうダメとか、泣くな！　涙はバレー部が復活したその日のためにとっておけ！』

泣き言を、部員の誰かが漏らしたのかな？　八九式からバレー部の磯辺さんの激励が聞こえた。

『今はここが私たちにとっての、東京体育館……あるいは代々木第一体育館だ！　そーれそれそれ！』

必死に自分たちを鼓舞してる。勝ち目がないから？

ううん、きっと大丈夫。

本命は、第二プランなんだもん――！

「！　坂っ！」

そしてみぽりんが、ついに木立の中にあった、坂道を見つける。

そこが私たちの、起死回生の唯一のポイント！

「あんこうチーム、ところてん『一本だけこぼれます作戦』、仕掛けます!!」

……って、わわわわわー！

八九式に続いて一気に坂を駆け上がったⅣ号とⅢ突が、思いっきり雪の地面でバウンドしちゃう。

だけどそこでⅣ号だけが急停止。麻子がすかさずバックギアを入れて、鮮やかにⅣ号を操った。

敵が追いつくより先に、真っ直ぐ行った八九式とⅢ突の経路から、脇に外れてⅣ号を隠す。

そこはちょうど斜面のおかげで、敵が通り過ぎるまで、見えなくなる場所。

だから追いかけてきた敵戦車が次々と、私たちの前を気付かずに素通りした。

ううん、もちろん敵もすぐ、Ⅲ突と八九式しかいないのに勘付くはず。

でも、わずかな時間だけど、確実な隙が生まれた。

——調子に乗って追撃してきた、敵フラッグ車が、Ⅳ号の前に飛び出すくらいには。

「冷泉さん！」

みぽりんが両足のペダルを踏んだ。

麻子のシートの背もたれに付いた板が連動し、Ⅳ号戦車が急発進する。

斜面を駆け下りる速度も利用して、あっという間に敵フラッグ車の真後ろに付いた。

「五十鈴さん‼　砲撃用意！」

「はい！　花を咲かせます……！」

相手が逃げるより早く、華が上下にしか動かない大砲で、狙いを付けた。

その時間、ほんの数秒もなかったと思う。

だけど私には、すごく長く感じられた。ズドン‼　って音だけが短く聞こえ、煙を散ら

して砲弾が飛んだ。

それは真っ直ぐに、無防備な敵フラッグ車の真後ろに突き刺さって——。

爆発！　……やった？

足を止めた敵フラッグ車の前で、麻子がⅣ号を停車させる。同時にゆかりんが、新しい弾を装填したよ。

華も、少しも気を抜かない。一発で倒せなければ、すぐにもう一発撃たなくちゃいけないから。

だけど、どうやらその必要はなかったみたい。

戦車ってさ、後ろからの攻撃に一番弱いんだってさ。

だからこそ性能で負けてる私たちは、こうして背後から強襲したわけで。

雪の上で、後部にあるエンジンをやられた敵のフラッグ車。そのダメージは明らかで……やがて一本、敗北を示す白旗が伸びた。



勝った……。
やった！　勝っちゃった！
倒したんだ――!!
『試合終了！　大洗女子学園、勝利！』
審判からのはっきりとした宣言が、私の耳に飛び込んでくる。
私は思わず振り返り、車内のみんなを見回した。
通信が聞こえるヘッドホンをしてたのは、私以外にはみぽりんだけだったけれど。私の表情で、きっと他のみんなにも伝わったみたい。
「……やりましたね！」
華が満面の笑みを浮かべた。
「勝った……勝っちゃいました――！　すごいです！」
ゆかりんが泣くほど喜んで、側のみぽりんに抱き付いたよ。
無線からも、『やった！』とか『ばんざーいっ！』とか、はしゃいでるのが伝わってくる。あはは！
「ふう。薄氷の勝利だな」
麻子がどっ、と操縦席の背もたれに沈んだ。
ほんと、それは私も思う。
ぎりぎりだったもんね。

というか――直後、そのことを心底思い知らされた。
雪を踏みしめる戦車の音が、いくつもした。
えっ？　私たちは誰もが、つい手近な鉄の扉を開けて、外にひょっこり顔を出す。
すると、そこに何台ものプラウダ校の戦車があった。
ひょええ！　と、取り囲まれてる？
「追いかけてきたのは、六輌だけじゃなかったんだ……」
みぽりんもその光景に息を呑んだ。
フラッグ車のすぐ後ろにも、残りの敵が続いてたんだね。真相を知り、私はぶるりと身震いした。
華が一発で仕留めてなかったら、Ⅳ号はたぶん、あっさりやられてた。
そしてⅢ突も、フラッグ車の八九式だって。
一歩間違ってたら、負けてたのは私たちの方だった。
私は言葉も出てこない。
でも……でも、でも！
勝ったんだよ‼
「やったね～、西住ちゃん！」

†

観客席の前に戻ってきた私たち、残った戦車を出迎えたのは、やられて先に回収されてた他のみんなだった。

その中から生徒会長の角谷先輩が進み出て、笑顔でねぎらう。

隣では小山先輩が、「ありがとう」って涙で大きな胸を詰まらせてた。

かわりに河嶋先輩が、無言でみぽりんにお辞儀したよ。

ううん、生徒会の三人だけじゃなくて。

「よく逃げ切ったなー！」

「すごいぞ！」

「おめでとう～！」

って、たくさんの歓声が私たちに浴びせられた。

もちろん、この雪の観客席に詰めかけた、ものすごい数の人たちからだよ！

全部で、何人くらいいるのかなあ？　千人……ううん、もっと？

——今回の試合会場は、雪も降るし大変なところだったけど、屋根付きのスタンドにはほんと大勢が詰めかけてた。

かなり長時間の試合になっちゃって、もう日も暮れかけてるのに、熱気はちっとも冷めやらない。すごーい！

中にはイケメンいないかな？

私のハートを狙ってる、恋泥棒さん！

なんてつい、私は見ちゃうけど。

それより目を引いたのは、正面のスクリーンに映し出された大洗女子学園の校章と、『決勝進出』の文字だった。

あ。ほんとに私たちが、勝ったんだ……。

側に並ぶぼろぼろのⅣ号戦車やⅢ突、八九式——それに壊れて牽引されてきたM3、ルノー、38tを見てるとても信じられないけどさ。

でも。

「昨年の優勝校に、勝っちゃったんだよね。私たち」

ようやく口に出してみて、実感してきた。

向かい合わせに並んだ、プラウダ高校の戦車のほとんどはきれいなままで、今でも夢じゃないのって思うけどさ。

すると、そのプラウダの戦車から、あの二人がやってくる。

背の高いノンナさんに肩車された、小柄なカチューシャさんだよ。

「まさか、包囲網の正面を突破できるとは思わなかったわ」

カチューシャさんは、ふいにそう話しかけてくる。

その目は、なんだか赤かった。泣いたの？

でも、気丈に振る舞ってる。試合前と同じ調子で、ノンナさんの上から私たちを見下ろしてた。

「誇っていいわよ。このカチューシャに勝ったんだから。去年はあなたのおかげで勝てたけど、今年は負けたわね」

「いえ。勝てたのは、たまたまです」
でも、みぽりんが謙遜（けんそん）した。
えっ、てカチューシャさんが意外そうな顔になる。
「最初に包囲されたとき、一気に攻撃されてたら、こちらが負けてたかも」
ううん、みぽりんは本音で語ってる。
確かに、三時間の猶予（ゆうよ）がなかったら——私たちは絶対に、あっさり負けてた。
それだけじゃなくって。
あの包囲網に突っ込んだ後も、ちょっとしたなにかで、結果は簡単に逆転して——。
「……。それはどうかしら」
けれど、カチューシャさんが否定した。
あれ？
「もしかしたら……。と、とにかく、あなたたちなかなかのもんよ！」
「え？」
みぽりんもきょとんとした。
これって私たちのこと、褒めてる？
「言っとくけど、悔しくなんかないから！　実力で負けたの！」
するとカチューシャさんは、「ノンナ！」って一声かけて、肩車から降ろしてもらった。
そのままみぽりんの前にくる。

すっと差し出すのは、右手だよ。
わかった。私は小柄な彼女が、あえてみぽりんを見上げる形をとったことで、気が付いた。
認めたんだ、みぽりんのことを。
だからみぽりんも、笑顔で彼女と握手を交わした。
「決勝戦、見に行くわ」
目は赤くても、カチューシャさんは堂々と言った。
「いい？　カチューシャを、がっかりさせないでよ」
「……はい！」
みぽりんもしっかりと頷いたよ。
——私たちは、去って行くカチューシャさんとノンナさんを敬礼で見送った。
礼に始まり、礼に終わる。それが戦車道なんだもの！
だけど……みんな、わかってた。自然と気を引き締めたのは、これで終わりじゃなかったから。
まだ、次がある。
最後の、決勝戦。
そこで絶対に勝たなくちゃいけない。
浮かれてる余裕なんて、ないよ。
でなければ私たちの大洗女子学園は、廃校になっちゃうんだから。

そして、その決勝の相手は――。

＊　＊

『戦車道全国大会、いよいよ準決勝の二試合を勝ち残った学校が決まりました！　一校は、なんと二十年ぶりに大会に出場した、ダークホース大洗女子学園！　そしてもう一校は……みなさんおなじみ！　昨年は惜しくも準優勝に終わった、リベンジに燃える黒森峰（くろもりみね）女学園です！』

準決勝の翌日。

大会のニュースが、テレビのワイドショーでも取り上げられてた。

それを寮の自室のテレビで見てたけど、私はすぐに消しちゃった。

大洗女子のことはさらりと終わって、黒森峰の特集みたいな流れになったから、というのもあるけど。

……ダメ。

なんか、ずっと呆（ほう）けちゃってた。

たぶん……プラウダ校との、あの激戦の反動なんだろね。

そして今日は、土曜日。

――この週末の土日は、戦車道の練習は完全にお休みになった。

というのも六台ある戦車のほとんどはダメージがすごくて、部品の発注とかでも時間が

かかっちゃうんだって。
うちの自動車部ってば、ほんとがんばって整備してくれてるんだけどね？
まあとりあえずこの二日間は、みんなそれぞれの時間を過ごしてるはず。
私も私服に眼鏡で、お昼が回ってからようやく起きて、さっきテレビ点けたってていたらくだよ。
でもさ、呆けてばかりもいられなかった。
だって……。
私はベッド側のガラステーブルに、ノートとある問題集を出していた。
その表紙にあるのは、『アマチュア無線二級』の文字。
そう、無線の免許を取ろうと思って、密かに勉強してたんだよね！
だって免許を取ったら、戦車でもっと強い電波が飛ばせるんだもん。
「……私は、戦闘じゃあ華やゆかりん、麻子みたいに直接活躍はできないけどさ」
初心を思い出し、ようやく「よし！」って気合いを入れた。
私にやれることは、たとえ微力だったとしても、全部やっちゃうんだから！
恋に戦車に、真っ直ぐなのが私流だよっ。
だけど、ねー。
「うう、む、難しいよぉおおおお〰〰〰」
——がんばって問題集を解いていくんだけど、あああ。
ぜんっぜん終わらない！

まだ半分くらいしか進んでないよ？
それでいて、最悪な事態が一つ。
「あ、明日が試験日なのに――――！」
ベッドの枕元に保管してある、一枚の封筒。その中にあるのは受験票と受験整理票の二枚だよ。
何度も確認した、そこに書かれてる日付は間違いなく明日なの！
うー、やばいやばいやばい！
あと、残り時間は……？
「！　って、もうすぐ日が暮れるじゃん⁉」
いつの間に？
夢中になってたせいで、日が沈み始めたのにも気付かなかった。部屋の窓から見える空は、とっくに夕焼けに染まってたよ。
ええと。徹夜でやったとしても、明日は朝から定期連絡船に乗って、学園艦から陸地に向かって。
それから試験会場を目指さなくちゃいけなくて――あわわわわ！
「ぜ、絶対間に合わないよ、これー！」
どよーん。
こんなにも絶望を感じたのは、昨日のプラウダ戦以来だよ……。
でも……まだ。

まだ、私にはぎりぎり、最後の希望があった。
「……。ほ、ほんとは知られたくなかったけど、背に腹は代えられないし！　ええい！」
ぴっぽっぱっ。私は自分のケータイを取り出して、ある相手に電話をかける。
頼りになる、戦車道の蝶野教官？
ううん、違う。
教官は今、大会の公式審判をやってるから、私が電話してもメールしても返事をくれない。でないと、公平じゃなくなっちゃうもん。
だから私がアテにしたのは、「学校一の天才」だった。
幼なじみの麻子だよ。この時間なら余裕で起きてるはずだしねっ。
『沙織か、なんの用だ？』
麻子はすぐに電話に出た。
「あ。麻子、今日はこれから、空いてる？」
『ああ。特に予定はない。戦車道の練習もないしな』
「よかった！　……あのね。いきなりなんだけどさ、麻子に、どーしても頼みたいことがあって！」
私は必死の思いで、麻子に事情を打ち明けた――。
そして、無事交渉は成立するよ。
『幼なじみのよしみだ。サンクスの窯出しとろけるプリン、五個で手を打とう』

ってなわけで、慌ててコンビニのサンクスまで出かけて、プリンを五個ゲットして帰ってくると——日の暮れた寮の前に、ちょうど麻子が来たとこだった。
それにしても、なんで、もっさりジャージ姿⁉
もー、このコってば昔っから、私服にはこだわりないんだから！
麻子ってちっちゃくてオンナノコしてるんだから、もっとオシャレすればかわいいのにい～。
女子の嗜みフラワーとか、やっぱガーリーとか、一度は着てみたいゴスとかさ～。あ、ペイズリーで大人の女ってのもいいよね！
私なんかコンビニ行くだけでも、いつ出会いがあるかわかんないから、流行が来そうなーんて女子力アップなモテレクチャーは、今日のところは置いとくとして……。
戦車柄のアウターにコンタクト装備だよ？
「麻子～！　今夜はお願い～！」
「任せろ。プリン五個ぶんの働きはしてやる」
きびきびとした動きで、「いくぞ」と麻子が、私の部屋まで先に向かった。
頼もしいー。
午前中はいつも寝ぼすけだけど、夜はほんと元気だよ、麻子！
そして部屋に入るなり彼女はまず、プリンの一つに手を付けた。
ついで、な感じでテーブルに出してた問題集をぱらぱらめくるよ。
「……なるほどな」

「どう？　いけそう？」
「焦るな。最初に全体を把握して、それから傾向と対策を練る。ところで合格点はいくつだ？」
「え？　ええと、確か……無線工学が１２５点満点で、８７点。法規は１５０点満点で１０５点、だったかな」
「それぞれ七割か。ふむ」
七割？　えっ、もしかして今、ぱぱっと頭で計算したの？
ふえー、さすが麻子だよ。
なんて私が驚いてるうちに麻子は、問題集をざっと見終わって閉じた。
ううん。もう一回頭から開いて、ノート脇に転がしてたシャーペンを取り、いくつかチェックを入れていく。
おおお？
「そ、そこ覚えたらいいってこと？」
「最低限、丸暗記しないと通用しない箇所を洗い出してる。まずはここからだ」
「うん。だよね……」
「それにしても、沙織が秘密の勉強とはな」
ふ、って麻子がプリンのカップを空にして、ちょっと笑った。
なによぅー。
「そんなに変？　だってかっこ悪いんだもん」

「……それでもなりふり構わずに、合格するため、私を呼んだというわけか」
「うん。かなり無茶だとは思うけどさ」
呼ぶなら、せめてもっと早く呼ぶべきだったよ。
そこは素直に反省する。
でも、どのみち戦車道の練習が優先だったから、麻子とかに負担かけたくなかったのよね。
なにより私は、「負けたら廃校」ってこと、知ってたしさ……。
でも。
「だいたいこんなところか。では、とっとと覚えるぞ、沙織」
麻子が頼もしく、問題集を突っ返してきた。
おおお、いけそう？
「う、うん！　……え、ちょっと待って」
なに、これ……。
私はぱらぱらと、問題集の最初のページをめくっただけで青ざめる。
だって——これ、チェックされた箇所、どれだけあるの？
全体だとかなりの量だよ？　ええっ？
「こんなに？　いや、前半部分は一度目を通してるから、覚えてるところも多いけど。時間、そんなにないよ？」
私は1DKのキッチンの方にある、壁掛け時計を見て言った。

今は夜の七時過ぎだから……睡眠時間を削ったとしても、あと十時間弱？　支度して連絡船に飛び乗ることを考えたら、それくらいしか余裕ないし。

「心配ない」

それでも麻子は、堂々と断言した。

コンビニの袋から、新しいプリンを取り出してくる。

けど、余った三個はひょこっと腰を上げて、キッチンの冷蔵庫に放り込んじゃった。

また後のお楽しみ、ってとこかな？

「残りは二時間で、一個のペースだな」

そして私の横に戻ってきて、そんなことを言う。

へ？

「プリンを完食するまでに、全部叩き込んでやる。いいな？」

「え……。って、じゃああと、四個だから八時間？」

「いや。二個目はすぐ平らげるから、六時間後だ。そんなに待てるか」

さっそくプリンの蓋をはがして、麻子がプラスチックのスプーンをくわえた。

ろ、ろくじかん……？

「なんでー!?　も、もう少し余裕あるよ？　徹夜で付き合ってくれるって話じゃん！」

「もちろん六時間ごときで終わらせない。その後は、ギリギリまで応用問題をやってもらう。当たり前だろう」

「あ。は、はい……」

そーですね。私はおとなしく納得した。
いや、麻子ってば目がマジだ。
超本気だよ！
「確約してやる。教えたところさえ完璧に抑えられれば、７０％くらいは正解できるぞ」
「いや、あの。その完璧ってのがまず、無理っぽいかな～って」
「いいからやれ。もう一分ロスした」
「ふ、ふひゃぁい！」
私は大慌てで、問題集に取り組み始めた。


THE ANCHOR

一ページごとに目を通した後、麻子がぱっと問題集を取り上げて、口頭で問いかけてくる。

麻子は……スパルタだったよ。

「一問不正解だ。覚え直せ」

「ええっ!?　戻るの？　でも、次々先に行かないと……」

「完璧に、と言ったはずだ。本来は、これくらい一目で覚えろ」

「無理――――！」

「？　なぜできない？」

本気で麻子ったら、首を傾げるし。

ああああああ。

天才ってこれだから！　凡人の苦労がわかんないし！

私、人選間違ったかも～～～～!?

6　やるだけのことはやった、よ？

朝だ……。

うん。朝、だよ。

ぴんぽーん。って、寮のインターホンが鳴った。あれ？

時間は、７時５５分。

そーだよ、私ってばもうセーラー服に着替えて、いつものネコのトートバッグに教科書も詰めてて。

「おはようございます、沙織（さおり）さん」

なんて、迎えにやってきた華（はな）と一緒に、寮を出た。

もちろん学校に行くためだよ。

だって今日は月曜日で……あ、あれえ？

「？　どうかしたのですか？」

「うー。な、なんか、頭がふらふらする～」

「えっ、大丈夫ですか？　風邪でもひいたのでは」

「あ。ううん、たぶんそんなんじゃないから。ちょっと、どうにも、脳を使い過ぎちゃっただけで……」

「はい？」

「あはは、なんでもないなんでもない！」
へろへろながらも私は、どうにか誤魔化した。
というか、丸一日ぶんの記憶が飛んでて、自分でも説明できないし！
華といつもの通学路を歩きながら、昨日のことを思い出そうとする。
ええと、朝まで麻子に付き合ってもらって……そのまま早朝の連絡船に乗ったよね？
そーだよ。日曜日は試験を受けた、はずなんだけど——。
あ、あれえ？
ほんと、さっぱり思い出せない！
いや。これはきっと、思い出したくないんだ。
……試験の結果は、少ししたら郵送されてくるみたいだけどさ。
ううう。
「沙織さん、昨日はゆっくりされなかったんですか？」
そんな私を華ったら、気遣ってくれる。
うー、優しさが染みるようぅ。
「うん、ちょっとね……。あ、華はなにしてたの？」
「はい。お母様が、急に生け花の展示会に呼んでくれて。それで、お花を生けに行っていました」
「！　えっ。お花の？」
あれ、って私は思っちゃう。

華の実家は華道の家元なんだけど——確か戦車道をやってるのがばれて、お母さんとはぎすぎすしてたはず?
なんて、私の考えを見透かしてか。
「お母様とは、仲直りできたんです」
って、華がふんわり笑った。
「そうなの? よかったじゃん、華〜」
「はい。この間の準決勝を、寒い中、観客席で見てくれてたみたいで。わたくしが本気で戦車道に取り組んでいるのを、理解してくれたのです。それでいきなりだったのですが、今のわたくしの花を見たい、と」
「で、展示したんだ? わ! 言ってくれればよかったのに!」
「いえ、あまりに急なことでしたし……」
「あ。そっか」
「それに、ちょっと恥ずかしくて。でも」
あの。って華(はな)がなんだかもじもじしながら、自分のケータイを学生鞄(かばん)から取り出した。
画面に映し出したのは、お花の写真!
わっ、これ、華が生けたヤツ?
「ええー! なんか、今までのとぜんぜん違う?」
私は目を丸くする。
以前から、華の生け花を見たことはあったよ。

でもそれはすごく正当派な感じで、しゅっとしてた。
だけど……今回のは、どーん、って感じ⁉
「すごい迫力じゃん！　あ、花瓶が、戦車の形してる？　しかもⅣ号？」
「これ、お母様が特別に用意してくれたんです。わたくしに、って」
ほんとに嬉しそうに、華がしゃべる。
「これは五十鈴流の生け花とは違う、新境地です。だからこそ、お母様にはわかってもらえました。わたくしのこれまでの花は、まとまってはいるけれど、個性として新しさに欠けていたと。……こんなに大胆で力強い作品ができたのは、戦車道のおかげかもしれない、って」
「うん。素敵だと思う。私、好きだよこれ」
写真に納められた華の生け花は、力強くて、でもどこか華みたく優しい感じもしてた。
って、私には華道のことは、あんまりわかんないんだけどねー。えへへ。
「これ、ケータイで撮ったのなら、メールで送ってくれたらいいのに〜」
「そ、そうしようと思ったのですが……思い切りが足らなくて。わたくし、まだまだですね」
華が照れた後、きりっと表情を引き締めた。
「華道もそうですが、もっと戦車道も極めたいと思います」
それは、決意。
私もぼーっとしてた頭が、ようやくしゃっきりしてくるよ。

だって次が決勝戦なんだもん。
負けられないよ。相手はみぽりんのお姉さんが率いる、強豪黒森峰女学園だけどさ。
――やがて学園艦の中央にある、見慣れた大洗女子学園の校舎が見えてくる。
そこにも『戦車道決勝進出おめでとう！』って垂れ幕がかかってた。あー、たぶん生徒会の仕業だね。
その下には、えっ？
あの数字って……もしかして、義援金のカウントまで？
「華！　見て、あれっ。けっこー集まってるよ、お金！」
「ほんとですね。そういえばお母様も、いくらか寄付したと言ってましたが」
いちじゅーひゃくせん、まん、じゅうまん……。
それは戦車を購入するには、きっとぜんぜん足りない額だろうけど。それでも十分に大金だよ～！
それは以前から、生徒会が学園艦とか大洗の町で、寄付を募ってたものだと思う。
みんな、応援してくれてるんだっ。
「……がんばらなきゃね、私たち」
「はい」
私と華は、しっかりと頷き合った。
だって優勝しないとこの学校が、来年にはなくなっちゃうんだから。

そして、その日は丸一日、戦車の整備にあてがわれたよ。
だって決勝戦までは時間ないし、まずは土日で大まかな修理だけ終わった六台の戦車の、細かい整備が必要だったから。
もちろん普段は自動車部ががんばってくれるんだけど……私たちも簡単なとこなら、自分でできるようになってたよ。
でないとプラウダ戦のときみたいに、応急修理だってできないしね？
だけど頼れる自動車部が、こっちを手伝えないのには、ちゃんとした理由があって――。
「みなさん、レストア終了です！」
放課後間際になって小山先輩が、セーラー服の下のおっきな胸を弾ませて、そんな報告をしてきた。
えっ、てそれぞれの戦車に取り付いてた私たちは、みんな一斉に顔を上げる。
ううん、小山先輩が来たときには、もうグラウンドを踏みしめる地響きで気付いてたよ。
がたたたたっ！　なんて履帯の音を軋ませて、こっちまでやってくるのは一台の戦車。
あれは、私が一年生たちと見つけたヤツ？
わー！　ようやく自動車部の手で、直ったんだね！
「あの８８ｍｍは！　ポルシェティーガーですね！」
Ⅳ号の上にいたゆかりんが、目をきらきらさせて名前を呼んだ。

え？　ポルシェって……あの高級車の？
知ってる知ってる。丸っこくてカエルさんみたいなヤツでしょ～。
いや、戦車のデザインは、まるで無骨な感じなんだけどさ。
あ、でも砲塔（ほうとう）は曲線でできてるよね？　ずいぶん前の方に付いてて、そのぶん長い砲身に迫力（はくりょく）があった。
「すごーい」
「強そう～」
一年生のコたちが感嘆の声を上げる。
うん、だよねー。
けど……あれ？
「見つけたときは、ばらばらだったからわからなかったけど。そっか、88mmって、ポルシェティーガーだったんだ……」
セーラー服のスカートを押さえたみぽりんが、Ⅳ号から降りてきて、なんかがっかりしてる。
ううん、それは小山（こやま）先輩と合流した、生徒会の会長さんや河嶋（かわしま）先輩も同じだよ。
その意味を、私はすぐに知ることになる。
「これレア戦車なんですよね～。マニアにはたまらない逸品です！」
走ってくるポルシェティーガーを前に、ゆかりんが熱を上げるけれど。
「まあ地面にめり込んだり、加熱して炎上したり、壊れやすいのが難点なんですけど」

……はい？　って、ゆかりんの言ったとおり――いきなりポルシェティーガーったら、グラウンドにめり込んだよ！
そこはさっき、整備の終わった戦車を洗ったせいで、水がたまってぬかるんでたとこ。けど普通だと、別にめり込んだりしないよ？
ど、どれだけ重いの⁉
というか、ぶもももも！　って脱出しようと、履帯が激しく空転して……えっ。
ぽん‼
「け、煙出てるよ、煙ー！」
私は思わず叫んじゃった！
でも、それ以上のことが起こる。
ぷすん。ってエンジン音が止まったと思ったら、今度はぼっ、と後部から火が⁉
きゃー‼
もちろん見てた私以外のみんなも、びっくりして大慌てだよ！
水？　あ、違う、消火器？
だっ、と倉庫の中に走って、取りに行こうとしてくれるコもいた。
だけど、ポルシェティーガーの中からひょっこり顔を出した、自動車部の人ときたら。
「あちゃー、またやっちゃった！　おーい、星野ー！　消火器消火器～」
なんて意外とのんびりとした口調で、車内に向かって声をかける。
やがてすぐにわらわらと中から、お揃いのオレンジ色のツナギを着た自動車部員が出て

くるよ。その手にはもちろん小型の消火器が握られてて、慣れた手つきで燃えてた戦車の火を消しちゃう。
「戦車とは呼びたくない戦車だよねー」
ふうー、やれやれだよ……。
さっそく焦げたポルシェティーガーを眺めながら、角谷(かどたに)先輩がぽつりと漏らした。
「で、でも！　足回りは弱いですが、８８ｍｍ砲の威力はバツグンですから！」
戦車ラブなゆかりんが、必死に「よかった捜し」をするよ。
隣ではみぽりんが、気持ちはわかるけど、みたいな苦笑いをしてた。あは、は。
でも消火を終えた自動車部の四人だけは、俄然(がぜん)やる気で。
「会長！　こいつは、自分たちに任せてもらっていいんですよね？　というかうちらでないと、たぶんまともに動かせないと思うし」
「電動モーターをガソリンエンジンで発電してぶん回す、なんて逆エコな代物だしね。そりゃ重くもなるわ」
「ピーキーすぎて素人には無理だね！　んでもうまくやれば、ドリフトとかできそうじゃない？」
「μ(ミュー)が低い場所で、雨が降ってればってとこかな。それよりアクセルバックはどう？」
とか、きゃいきゃいしてた。
え、というか……自動車部が参加してくれるの？
そんなの、百人力だよ～！

それはみぽりんも同感のようで、ようやく嬉しそうに微笑んでた。
「これで、全部で七輌になりましたね」
その横で、遅れてⅣ号の中から出てきた華が言う。あ、Ⅳ号にあった消火器を持ってきてくれたんだ？
「だが、まだ七輌だ」
でも、そう水を差したのは麻子だった。潜り込んでたⅣ号の下から出てきて、セーラー服の汚れを払う。
「確か次の決勝戦は、二十輌まで参加できる、というルールに決まったんだったな」
うっ。麻子の言葉に私も華も、みぽりんもたじろいだ。
七対二十って、つまり。
あのプラウダ戦よりも、大変ってことだよね。ひー。
「おそらく相手戦車の配置は、ティーガー、パンター。それにヤークトパンター……確かに、あまりにも戦力差が」
みぽりんが難しい顔をして唸った。
そんな危機感はもちろん、生徒会のメンバーも持ってたよ。
「いろんなクラブも義援金を出してはくれたんだけど、今ある戦車の補強、改造が精一杯で。どこかで戦車を叩き売りしてたらよかったんだけど……」
事務担当の小山先輩が、ぽろりと台所事情を嘆く。

「もう他に、戦車はないんでしょうか」
「あれば、すごく助かるよねー」
隣で会長さんが、干しイモを齧りながら考える。
やがて、指をぱちんと鳴らした。
えっ？
「ま、やるだけやってみようか～。艦内は捜したからさ、やるとしたらもう、手は一つしかないよね」

†

『大洗女子学園の皆様、皆様の風紀を守る、皆様に愛されている風紀委員です。戦車を見かけたら、速やかにお知らせください』
ピックアップトラックを走らせて、ソド子さんたち風紀委員の三人が、拡声器で呼びかける。
走るのは学園の、広いメインストリートだよ。
ここなら公道じゃなくて学校の敷地内だから、私たち学生だって、免許がなくても自動車を運転できるんだよね。
私はできないけどさ、日頃戦車を動かしてるのに比べたら、簡単みたい。
『戦車を見かけた方はご一報くださーい』

他にも校舎の裏を歩く、拡声器を手にした一年生たちの声が響いた。
一緒に行動してたのは、私。
そう、結局「艦の中にないなら上じゃない？」なんて会長さんの判断で——私たちは改めて、今度は学園の敷地内をくまなくうろつくことになったの。
というか、前回もⅣ号の長砲身が、自動車部の「物干し竿」にうっかり使われちゃってたし。
そんな「盲点」みたく、見落としがあるかも……って、わずかな可能性に賭けたわけ。
そもそも大洗女子学園って、普通科が三つもあるし、そこに被服科と商業科の校舎もあった。
それに付随して敷地も広くて、木造の旧校舎は残されてるわ、あちこちにクラブ棟が乱立してたし。そのすべてを隅々まで見て回るのはたぶん、私たち戦車道チームだけだと無理なんだよね。
だからこうして手分けして、「声かけ」運動してるわけで。
『ご不要の戦車回収しまーす』
いや、違うよ？
「あやちゃん、それ粗大ゴミの業者さんだから」
私は思わずツッコミを入れちゃう。
てへ、って拡声器を持ってた、眼鏡をかけた一年生がおどけて見せた。
「ごめんなさーい。だって、言ってみたくなっちゃって」

「もー、あやったらおバカなんだからあ」
「ひどーい！　よりによってゆきちゃんに言われたー！」
「あはは。でも気持ちはわかる〜」
一年生の六人が、けらけら笑って楽しそうにはしゃいだ。
私も微笑ましくなるけど、つい溜息を漏らしちゃった。
うー、だって。
たとえ戦車が見つかっても、まだ他にも問題はあるわけで。
「？　どーしたんですか、沙織せんぱーい」
なんて私の様子に気付いてか、一年生チームのリーダー、梓ちゃんが訊いてくる。
うわっ。このコってば、ほんとよく他人のこと見てるんだよね。
そりゃ、リーダーにもなっちゃうよ。
「うん、あのね。みぽりん……隊長の西住さんも心配してたんだけどさ。戦車が見つかっても、結局は人員が足りてないから、そっちも補充しないと間に合わないな〜って」
だから、なのかな。
私はつい、頼れる梓ちゃんに打ち明けた。
慕われオーラっていいよね。……頼りがいのある女の子って、男子にももちろんモテちゃうのかな？
いや、梓ちゃんから、彼氏の話は聞いたことないんだけどさ。
——そのとき。

かわりに彼氏がいたことのある一年生、ゆきちゃんこと優季ちゃんが口を開いた。
「あ。それならわたし、心当たりありますよ。せんぱいっ」
「え？　ほ、ほんとに？」
「はい！　なんだったら、今から声かけてみますね～」
なんて言うとゆきちゃんたら、ケータイを取り出してメールをする。
おおお、すごいよゆきちゃん！　私も友達多い方だけど、そーゆー知り合いはなくて、困ってたよ！
さすがはネトゲで、さらりと彼氏をつくるだけのことはあるね！

……なんて、思ってたら。
「リアルでは初めましてー！　ボクがねこにゃーだよ……って、あれ？　武部さん？」
「！　ねこにゃーさんって、えええ!!　彼女だったの!?」
連絡が付いて、待ち合わせ場所となった食堂脇のちょっとした休憩ラウンジ。
そこにやってきたのは、髪が長くて美人なのに、度の強い眼鏡をかけた女の子――なんと私やゆかりん、華とはクラスメイトの、猫田さんだよ！
えー！
ど、どういうこと？
「あ、お知り合いだったんですかあ？」
むしろ呼び出したゆきちゃんも、他の一年生同様びっくりしてた。

うん。てゆーか、ケータイ番号もメアドも知ってるよー。
向こうはゲーム仲間といつも一緒で、どっぷり話をしたことはないんだけどね……って、あああ。
「そっか、猫田さんってゲーマーで！　もしかして、その繋がり？」
「はい。最近戦車道の練習がてらに始めた、戦車もののネトゲで知り合ったんですよ」
ゆきちゃんが明るく説明する。
でも、「……彼氏に振られた勢いで、別のゲームに手を出しただけですけどね」なんてちょっとやさぐれた。
「ゆきちゃん！」
「ふ、ファイトだよ、ゆきちゃん！」
「男なんて星の数ほどいるって～」
「そーだよ、ぜんぜん大丈夫！　この沙織先輩だって、恋愛の達人なのに、まだ彼氏いないんだから」
すぐに一年生たちが励ますけど。
……あの、最後の一言は、私にダメージだよ。うん。
そ、それはともかく。
「あの、武部さん。まだ戦車道の人員募集してるって、ほんと……？」
猫田さん、ううん、ねこにゃーさんがおずおずと訊いてきた。
「よかったら、その。ボクも今から戦車道、取れないかなって」

「⁉　ほんとに？　やってくれるの？」
「うん。あのね、本当はずっと気になってたんだ。今日誘われるまで、なかなか勇気が出なかったんだけど、ぜひ協力したくて」
とん、って彼女は自分の胸元を軽く叩いた。
「ずっと戦車を動かすオンラインゲームをやってて、操縦はね、慣れてるから」
「ありがと――‼　すっごく嬉しい！　ね、みんな！」
「はーい！」
一年生が私と一緒に、素直に喜ぶ。
ううん、私たちだけじゃなくって。
「きっとみぽりんや華も、大喜びしてくれるよ～！　あっ、すぐにメールしとかなきゃ！
さーて、あとは戦車がもう一台見つかってくれれば、万々歳なんだけどー」
ちょっと苦笑しながらも、私はとりあえず、報告のメールをしようとする。
だけど、そのとき。
「戦車って、あの戦車は試合に出ないの？」
ふいにねこにゃーさんが言った。
へ？
あの戦車、って……。
「あるじゃん！　戦車ー！」

ねこにゃーさんの言うとおり。

先生の車であふれる学園の駐車場の片隅に、のっそりと佇(たたず)む戦車が一台あった。

連絡を受けてやってきたみぽりんも、私や一年生と一緒に、呆然(ぼうぜん)と見上げてる。

「こんなところに、三式中戦車が……」

「おおお！　このシンプルな箱形スタイルは……三式チヌですね～！」

みぽりんに付いてきたゆかりりんも、大興奮だよ。

三式、ちぬ？　それがこの戦車の名前なのかな。

えー、でもどうして？

こんな戦車、前からここにあったっけ？

――なんて思ってたら。

「わかったよ、西住(にしずみ)ちゃーん。それ、学園長の戦車だってさー」

生徒会長の角谷(かどたに)先輩が、小山(こやま)先輩と河嶋(かわしま)先輩を引き連れて、駐車場にやってきた。

えっ、そーなの？

ゆかりんがなんか、「おお、憧れの１ＰＬＤＫ生活ですか？　さすが学園長！」とか、いっそう目をきらきらさせてた。

１Ｐ……Ｐって、なに？　パンツ？

ま、まあいいけど。

「以前、蝶野(ちょうの)教官の１０式戦車に、学園長の高級車が潰されただろう。どうやらあの補償金で、今度は絶対に壊されないようにと、中古で戦車を買ってたらしい」

補足するのは河嶋先輩。
ただし、なんか片眼鏡(かためがね)をぎらりとさせる。
「しかも我々にばれないよう早朝に来て、遅くにこそこそ帰るという姑息(こそく)な真似(まね)をしていたようだ。問い詰めたらあっさりゲロったぞ。駐車場所もこんな、わかりにくい奥まった片隅にしていたとは、まったく」
「で、うまくやってきたんだろーね、河嶋〜」
「もちろんです！」
会長さんに促され、河嶋先輩がセーラー服の胸ポケットから出してきたのは、一枚の紙切れだった。
それは……うん？　「強制接収許可書」って……。
「生徒会権限で、大会の実績をネタに無理矢理(むりやり)借り受けてきました！　決勝戦が終わるまで、うちで扱っていいそうです！」
にやり、って河嶋先輩は笑ったよ。
「あは、は。学園長、泣いてましたけどね」
その横で小山先輩は、ちょっと同情するような顔してた。
一方、三式戦車に夢中なゆかりんたら、別のことに気が付いちゃう。
「あ、だからこれ、保守パーツとかナンバーとかつけられてるんですね！」
「へ？　ほしゅ……ってなに？　ゆかりん」
「ほら、ウインカーとか後付けのヘッドライトとかですよ。戦車道をするには、いらない

部品ですけれど」
あー、なるほど。
言われて初めて私も気付く。確かに三式戦車には、ライトとかオレンジのウィンカーが付いていた。
さらにみぽりんが中に入って、他にもいろいろ確かめる。
「よかった、砲塔はダミーじゃない。安全装置になってる詰め物さえ取れば、使用できそう」
ひょっこり三式から頭を出して、そんな報告をしてきたよ。
ほんとに？　よ、よかった～。
「なら砲塔の整備と、邪魔な保守パーツの取り外しを自動車部に頼まないとな」
さっそく河嶋先輩が、ケータイを取り出して連絡する。
さて、あとは残りの人員の問題だけれども。
「あ、ボク、ねこにゃーです」
私たちが三式に夢中になってる側で、ねこにゃーさんが新しく来た女の子たちに挨拶してた。
それは彼女が呼び出した、学校の戦車ゲーム仲間だよ。
「あ、あなたが!?　ももがーです」
ぺこり。ってお辞儀したのは、ヘアバンドで前髪をアップにしたコ。……って、やっぱり初対面なの？

ううん、さらにもう一人も同様で。
「わたし、ぴよたんです」
後ろで髪をまとめた、そばかすの女の子が挨拶する。
おおっ！　ってねこにゃーさんが興奮したよ。
「ぴよたんさん⁉　初めまして！」
「誘ってくれてありがと～。本物の戦車を動かせるなんて、マジヤバイ！」
三人はなんか、すぐに意気投合して三式の周りをぐるぐる回った。
そこに、いつしかゆかりんまで混ざって、戦車ゲームに誘われてたよ。あはは。
でも、なにはともあれ――これで戦力の増強はできたね。
うんっ！

††

そして、あっという間に時間はすぎて、もう明日が決勝戦になっちゃった。
八台に増えた戦車の整備と強化も、日暮れ前にどーにか終わったよ。
見つけたばかりの三式チヌは、きちんと自動車部が整備してくれたし。他にも義援金を使って、戦車をちょっと改造しちゃう。
「ヘッツァーもどきになりましたね、会長！」
「うん、まあね～。これで少しはマシになるかもね」

干しイモを食べながら会長さんが、河嶋（かわしま）先輩とともに、カメさんチームの38tを見る。

ううん、もう38tじゃなくて、「ヘッツァー」って呼ぶのが正しいみたい。

そーゆーのよくわかんないけど、確かに形はだいぶ変わったもんね。

倉庫内にあるクレーンを使って、上部をまるごと付け替えちゃったんだもん。

他にも義援金を使って買ったのは、「シュルツェン」とかゆーおっきな装甲板。

これはなんと、Ⅳ号の左右に付けた。

おー。両側面がまるまる覆われて、確かに強そうな感じになったよ！

「うわー！　長砲身にしたときもF2っぽくてかっこよかったですが、これはもう、マークフォースペシャルだ！　かっこいいですねー！」

ゆかりんが何度もⅣ号を眺めては、うっとりとした溜息（ためいき）を漏らす。

——これで、私たちの作業は全部終わっちゃった。いつもならもっと、夜になるまでがんばるんだけど。

「では、これで作業終了！」

河嶋先輩が倉庫内で、整備を終えて整列した私たちに向かって言った。

「さ〜、いよいよ決勝戦だよー」

その横で会長さんが、やっぱり干しイモを齧（かじ）りつつ、まとめに入る。

「目標は優勝！　だからね〜」

「……大それた目標なのは、わかっている。だが、我々にはもう後がない。負けれ

ば……」
うん。
河嶋先輩に言われなくても、もう私たち全員がわかってる。倉庫内の空気が自然と引き締まった。
そこで唐突に、会長さんが「じゃあ西住ちゃんもなんか一言」って、みぽりんに振っちゃう。
ううん、だって隊長なのはみぽりんだもんね。
そして実質、私たちをここまで引っ張ってきたのも、彼女で。
「わ、わたしがですか？　え、ええと」
でもみぽりんたら相変わらず、戦車の外だとわたわたするよ。
それでも——やがてゆっくり、並んだ私たち全員の顔を眺めて、語り出した。
「……明日、対戦する黒森峰女学園は、わたしがいた学校です。でも、今はこの大洗女子がわたしの大切な母校で……」
おずおずとだけど、みぽりんはしっかり自分の気持ちを伝えるよ。
「だから、あの。わたしも一生懸命がんばりますので、みなさんもがんばりましょう！」
「「「「お——！」」」」
みんな、思わず一斉に声を上げた。
みぽりんたら一瞬びくっ、てしちゃったけどね。あはは。
てなわけで、私たち戦車道チームは明日に備えて、早めの解散となった——。

さーて、じゃあ！

「ねえ、みぽりーん。あんこうチームで、ご飯会やらない？　ずっと前、みぽりんちでやったみたいにさ」

「えっ。うん！　わたしの部屋でよければ」

「毎回みぽりんとこだと悪いよー。今日は私の寮でやろっ。……とゆーか、実は仕込みはもう、今朝やってきたの」

ね？　って私はもちろん、華に麻子、ゆかりんも誘うよ。

「決勝戦を前に、改めて、チームの親睦を深めないとね？　だって前は、確かまだ麻子とは一緒じゃなかったしさ」

「あ、そうでしたね」

華がうんうん頷いた。

「あのときは肉じゃが、でしたっけ。また沙織さんのご飯、食べたいです。今日はなにを？」

「ふっふーん。それは、秘密～」

私はちょっともったいぶる。

と、かわりに麻子が口を開いた。

「……決勝戦の前日だからな、沙織のことだ。どうせ」

「ストップ、麻子！　いーじゃんっ、後のお楽しみってことでさー」

「おおっ、前夜祭って感じですね！」

麻子と違ってゆかりんは、無邪気に目をきらきらさせた。おー、なんか近いかも？

「いや、祭りじゃないだろう」

麻子にはそう、冷静にツッコミ入れられちゃったけどね。

もののたとえだってば～！

■エピローグ　みんなでゲンをカツごうよ！

かくして、学校を後にして――あんこうチームのみんなが、私の寮の部屋にやってきた。

「んじゃ～、ちゃっちゃとつくっちゃうねー！」

キッチンが狭いから、みんなにはテーブルの前でくつろいでもらって、私はさっそくコンタクトレンズから眼鏡に換えた。

料理するときはやっぱ、こうでなきゃ気合い入らないのよね。

それに眼鏡は、できる女子のギャップ萌えだしさ。

んで、最後にフリフリのエプロンを装着すると、シンクの下から網の付いた鍋を取り出した。

それは揚げ物専用のヤツ。

――そう。冷蔵庫の中で仕込んでおいたのは、衣を付けた五枚のトンカツだよ。

だって、「勝負にカツ！」ってね？

ゲンを担ぐところが、気配りのできるいいお嫁さんでしょー？

みんなもこっちを覗き込んで、「おおっ！」ってなってる。

はいはーい、ちょっと待っててね。

キッチンの換気扇を回してから、鍋に菜種油を入れて、まずは適温になるまで加熱し

てっと。
「？　あれ？」
油が跳ねたとき用に、私はドアの郵便受けから、チラシを適当に持ってこようとする。
新聞は取ってないけど、一応学生寮だから、学生向けの広告とか毎日入っているのよね。
だけどその中に混じって、茶封筒が一つ混ざってた。
これは……『財団法人日本無線協会』から⁉
「これって、まさか！」
うわー！
どきどきしながら私は、慌てて封筒を開けた。恐る恐る、中を見ると……。
おお、おおおおおおおおおおおおおっ？
「どうかしたの、武部さん？」
みぽりんが私の様子に気が付いて、キッチンを覗き込んで訊いてくる。
だから。
「じゃーん！　実は、重大な発表があります！」



私はみんなのいる部屋に入って、もったいぶって茶封筒を後ろ手に隠した。
「えー、こほん。実は、私……」
「婚約したんですか⁉」
いきなり、ゆかりりんが思い切り目を見開いた。
へ？
「彼氏もいないのに……⁉」
いや、ちょっと。
華（はな）ったら、びっくりしすぎだし、的確すぎるし。
「ち、違うわよ‼」
とりあえず全力で否定しとく。だってみぽりんが、マジで信じそうな顔してたから。
かわりに、じゃん！　ってみんなの前に、封筒の中身を見せた。
入ってたのは、台紙からぺりぺり剥（は）がせる、一枚のカード。
そこには『無線従業者免許証』の文字と、受験票に貼って提出した、私の顔写真があって——。
「アマチュア無線二級に、合格しました！　いぇいいっ」
「まぁ！」
華がさっきとは打って変わって、感心する。
いっそう目を丸くするのは、ゆかりりんだった。

「四級どころか、二級なんて！」
「え、二級ってけっこう難しいんじゃ」
みぽりんもすごく驚いてる。
一人おとなしいのは、事情を知ってた麻子くらいだよ。
「いやー、大変だったよ。麻子に勉強付き合ってもらって、どーにかって感じかな～。でも受かってて、よかった！」
「教える方が大変だった……」
麻子がしみじみ言う。
ご、ごめーん。
でも麻子ったら、不思議そうに首を捻った。
「しかし、結果は免許とは別に、試験後に会場ですぐ発表されるはずだが？　報告がないからてっきり、落ちたものだと思ってあえて触れなかったのに」
「へ？　えええ、そーなの？　……いや、私、なんか試験当日の記憶すこーんって飛んでて。えへへ……」
「徹夜で無理矢理詰め込ませたからな。まあ、沙織の頭だとオーバーヒートするのは仕方ないか。だが、結果がすべてだ」
ぐっじょぶ、って麻子は親指を一本立ててた。
確かに、麻子のおかげだよね。
間違いなく、プリン五個ぶん以上の価値はあったよ～。

「すごい、武部さんっ」
「通信手の鑑ですね！」
みぽりんとゆかりんがベタ褒めする。
うーん、もっと褒めて褒めて！
「ほら、いつか……アンツィオ高校と試合したとき。遠距離で、通信の電波が途切れがちだったでしょ？　あれってでも、無線の周波数をアップできればクリアに聴けるみたいってわかったからさ。でもそのためにはなるべく上の方の資格を取らなきゃダメで、んで、がんばってみたの。これで無線機の、周波数をアップできるよね？」
「あ、そうですね！　明日の試合前のレギュレーションチェック時に、審判に使用帯域の封印を解除してもらえます！」
そう、ゆかりんの言うとおり。今使ってるⅣ号の無線機って、使える周波数をあえて抑えちゃってるのよね。
それは使う私に、免許がなかったから。
でも、これからは違うもん！
「明日の連絡、指示は任せて！　Ⅳ号からの発信限定になっちゃうけどさ、どんなとこでも電波飛ばしちゃうから！」
つまり隊長のみぽりんの命令だけは、必ずみんなに届くってことだよ。
えっへん！
「いやー、決勝戦に間に合ってほんとよかったよぅ」

「まさか沙織さんが、そんな免許を取ってただなんて。重大発表がこんなことだとは思いませんでした」

心底意外だったのか、華がまだびっくりしてた。

うん、って向かいでみぽりんも頷く。

「婚約発表は、ないと思ってたけど……」

「あ、みぽりん、なにげにひどい！」

あるよ、可能性は！

だって恋は、いつでも突然来ちゃうものなんだから——って結婚情報誌に書いてたし！

えーいっ、わかった！

「じゃあ私、もし試合に勝ったら婚約してみせる！　絶対！」

うん！　って私は固く誓う。

もちろん、勢いだけで言ったんじゃないよ？

「どういう理屈なんだ、それ」

麻子が呆れてたけど、ほら。

勝ったらってことは、「優勝」だよ？

もちろん戦車道のテレビで、確実に取り上げられちゃうんだよ？

だったら今度こそ、イケメンさんとの出会いの確率だって、跳ね上がっちゃうじゃない？

それで、私の結婚したいって気持ちが１００％……ううん。相手と二人で１００とする

なら、一人でフルの50%でしょ。
んで、イケメンさんは私を求めて出会った時点で、0%ってことはないよね？
ほーら。二人の%を足せば、確実に過半数は超えて、結婚する確率は四捨五入で100%。
つまり――パーフェクトじゃん！
「いけるいける！　だってこの世はね、私の将来の旦那様と、それ以外のたった二つでできてるんだもん」
「……。沙織の二元論は、大ざっぱすぎる」
麻子がなんだか頭を押さえた。
そう？　わっかりやすいでしょー。
それより。
「みぽりんこそ、彼氏の一人でもつくってみなさいよ～」
「え、わたし？」
突然話を振られてか、みぽりんたら目をしばしばさせた。
でも、すぐにちょっと赤くなって。
「わたしは……みんなと一緒にいるのが、今すごく楽しいから。武部さん、五十鈴さん、冷泉さんに秋山さん。みんなのことが大好きだから……」
――それはふいの、みぽりんの告白だった。
おおお？

「みほさん」

華（はな）がふんわり、嬉（うれ）しそうに微笑（ほほえ）んだ。

ゆかりんが完全に、本気にした目になってる。

「に、西住（にしずみ）殿に告られました！」

「……」

って、ちょっと麻子（まこ）？　みぽりんより赤くなってるよ？

いやいや、あのね。

「みぽりん。嬉（うれ）しいけど、なんか女子としては間違ってるよ、それ」

「ええ〜〜〜〜っ」

なんで？　って感じでみぽりんがきょとんとする。

その様子があまりにも素直で……ぷっ。私たち他のみんなは、思わず吹き出しちゃった。

あはは、ってみぽりんも交えて五人で笑う。

って、おっとっと。そーいえばお鍋、ほったらかしだった。

キッチンに戻ると、油はちょうどいい感じに熱されてたよ。

菜箸（さいばし）で、パン粉の欠片（かけら）を落とすと、うん！　しゅわしゅわとうまく泡が出てる。

「よーし、じゃあちゃっちゃと揚げちゃうね〜！」

私は気合いを入れて、トンカツの揚げにかかった。

できあがったのはトンカツ以外に、仕込んでおいたシーザーサラダとポテトサラダ！
ほわ〜！　我ながら、いーい感じにできたよ！
衣もこんがりきつね色だしっ。
「いっただっきまーす！」
そして五人で手を合わせて、華の生けた花瓶のお花を眺めながら、さっそく食べることにする。
でも、そーだ。
ちょっと待った！
「おっといけない、先に写真撮ろっか」
私はケータイを取り出して、一枚ぱしゃり。
それを手早く、メールに添付して送信しちゃう。
ただし、宛先は一人じゃなくて……。
「？　なにしてる、沙織。もう食べてもいいか？」
じゅるり、って箸を伸ばしたまま固まってた麻子が、がんばってよだれを我慢してた。
「あ、ごめーん！　もういいよ。ちょっとね、カツのお裾分けしたの」
「お裾分け、ですか？」
この隙にご飯を特盛りにしてた華が、「あっ」と気付く。
「もしかして、他のみなさんにも？」
「そ！　ほら、いつか無線傍受されたときに、各チームにメールで一斉送信したでしょ？

そのときのリストを使ってさ」
だって明日は私たちだけじゃなくって、全員で勝たなきゃならないんだもんね。
そうしてようやく、いただきますのやり直しをした。
さーて、お味はどうかな～？
「……！　おいしい！」
さくさくとカツを頬張って、みぽりんがほんとに嬉しそうな顔をした。
やったあ！
「カラッと揚がっていますね」
華が上品に、だけどすごいスピードで食べていく。
おおお、好評なようでよかったよ。
「武部殿はほんと、いつでもお嫁にいけますよ！」
ゆかりんなんか、ベタ褒めだよ。
でしょ～？
なんて私もにこにこしてたら。
……あれ？　ケータイに、メールの着信が？
私はぺたんと座ってた脇に置いてた、自分のケータイを拾い上げた。
すると……あら？　また着信？
ううん、一通だけじゃない。画面を開くと新着メールが、わわっ、どんどん増えてるよー！

「って、これ、さっき送ったみんなからの返信？」
「どうした、沙織？」
横にいた麻子が、ひょいって画面を覗きにくる。
そして二人して、びっくりした。というのも届いた返信メールには、全部写真が添付されてたの。
それらはメンチカツだったり、カツサンドや串カツとか。
カツカレーもあれば、カツ丼にカツバーガー、それにハムカツパンなんてのまで——！
もちろんみぽりんや華、ゆかりんにも見せたら、みんな目を丸くしてた。
でもすぐに、私たち五人はけらけら笑い合った。
「あーもう、みんな同じこと考えてたんだね！」
そう、私たち含めて八つのチームは、全員で一つなんだもん。
願いも、たった一つだけ。
私はぐっと拳を握って、天井に向かって突き上げた。
「さあ！　明日はひたすら勝利に向かって、パンツァー・フォーだよ！」
「「「「おー！」」」」
みんなも声を重ねてくれる。
うん！　勝つよー！　私たちは……絶対に‼

あとがき

お待たせしました。『ガールズ&パンツァー』ノベライズ第二巻です！

今回は一巻に続き、アニメ第七話～十話までの流れをまとめました。

ええ、あの。……十話まで、なんです（汗）。

●要するに、第十一話と十二話に関しては、「三巻で」ということに……！

●本来は二巻で終わる予定だったのですが……書いてる私が一番驚きましたとも。いろいろ事情はあるものです、はい。

●ただ、おかげさまで一巻の売れ行きがよくて、「これなら三巻を出しても大丈夫！」という判断が出たためでもあります。みなさん、ありがとうございます！

●そういうわけで、二巻はいいところでエピローグとなってしまいました。そのぶん、沙織ちゃんのエピソードをきちんと盛り込んだつもりではありますが。

●また、一巻に続き、他の媒体からの要素も取り込んでありますよ？　キャラクターソングや新作OVAをチェックされてる方は、にやりとしてくださいね～。

●一方、アニメではほぼ描写がなくて、かわりにコミカライズで出番のあるアンチョビ戦に関してですが——流れの都合で、小説版独自の展開となりました。というか今回、全体的に細かなところで話を調整してあります。

●大洗女子の戦車のカラー変更も、アニメだと大会前になってるのですが、この二巻に組み込むこととなりました。いやはやー。

で、続く三巻なのですが。もちろん、二巻に収まらなかった十一話と十二話が入ります。

しかしさすがにそれだけだと一冊の分量には足りませんので、せっかくの追加の三巻ですし……こうなったら「面白いこと」をやろうと思っています！

具体的にはまだ書けませんが、ガルパンファンのみなさんが楽しめるものを提供するつもりですよ。「もしかして……？」なんて予想しつつ、お待ちいただけると嬉しいです。

それでは、ラストの三巻でお会いしましょう！

２０１３年2月　ひびき遊

著者

ひびき遊（ひびき・ゆう）

関西在住の玩具マニア。ガルパン人気すごいですね！　思わずトランスフォーマーのブラジオン（90式戦車）が欲しくなりました。……砲身が日本刀になるという、戦車マニアからするとトンデモなヤツですが。

イラストレーター

島田フミカネ（しまだ・ふみかね）

メカ少女に定評のあるイラストレーター。代表作に『ストライク・ウィッチーズ』など。『ガールズ＆パンツァー』ではキャラクター原案をつとめる。

本文イラスト

京極しん（きょうごく・しん）

滋賀県出身のイラストレーター。

代表作は『ほうかご百物語』（電撃文庫）、『もて？モテ！ある日突然モテ期になった！』（ＭＦ文庫Ｊ）など。

娘ＴＹＰＥ（角川書店）にて『ストライク・ウィッチーズ』公式コミックを連載するなど幅広く活動。

同人サークル「ＩＮＦＩＮＩＴＹ ＤＲＩＶＥ」を主宰。

ガールズ&パンツァー2

著者名……ひびき遊
発行者……三坂泰二
発行所……株式会社メディアファクトリー
http://www.mediafactory.co.jp/

2013年2月28日　電子書籍版　ver.1.0.1